典型的な魔王討伐物語

ルト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
典型的な魔王討伐物語

【Ｎコード】
Ｎ９０２０Ｗ

【作者名】
ルト

【あらすじ】
ふとしたことで、俺は死んだ。死んだはずの俺が、次に気がついたら、この世ならざる異世界の神殿に立っていた。そして現れた神子に、勇者様、と呼ばれ、魔王を倒す旅に出ることになる。

1：　出現する

あるとき、全く突然に、俺は死んだ。
殺されたと言ったほうが正しいか。
刃渡り十八センチ、まるで剣のような、反りのないナイフを真っ直ぐ心臓に突き立てられて。
実にあっさりと、俺は、穂村忠志という人間は、命を落とした。

「そして君は、その結末に納得していない。そうだろう？」

その通り。
俺はまだ何も残していない。

「でも、それは駄目だ。世界はそれを許すほど、易(やさ)しくはない」

許しなど請わない。
俺はただ俺がすべきと思った筋を通すだけだ。

「曲がるつもりは？」

答える必要が？

「……いいだろう。負けたよ。君に救いと罰を与えよう」

救い、と、罰？　それはどういうことだ？

「そのままだよ。さあ、行くといい。道が閉じる前に」

などという夢を見た。
というのはつまり、俺はたった今目を覚ましたのであり、目を覚ますということは先ほどまで眠っていたということであり、眠っていた間の記憶というのはおおむね夢と呼んで差し支えない。
そして夢から覚めたのだから、俺の前に広がるのは現実でなければならないはずだ。
しかし、夢から覚めた先がまだ夢であったかのような、水面から顔を出した先が水底で歪み揺らめく水面を見上げているような、そんな奇妙な錯覚を感じずにはいられなかった。

石造りの神殿を思わせる装飾の彫り込まれた柱や壁、三階ぐらいまで吹き抜けていそうな高い天井があり、それを囲うようなステンドグラスが色に濁らせた光を降らせる。
天井には天上を描いたような宗教画が描かれている。
テンジョウだけに。
くだらないことはさておき、見た感じ二十メートル四方はあるだろうか。
そっくり同じ形をした四方の壁の一面にだけ、観音開きの簡素な木扉がある。
柱の燭台と採光窓から差し込む白い光が、薄暗く部屋を照らしている。
その割りには礼拝堂ではないらしく、聖像もなく座席もない。素っ気ない石畳が敷かれている。
しかし、そんじょそこらの石畳とは違うことは、一目で分かる。
巨大な、一枚が一抱えもありそうな正方形の石畳が、秩序だって並べられているのだ。
どれほどの岩から切り出したのか、この広さを埋めるだけ揃えるためにどれだけ必要だったのか、想像もつかない。
どこか乾いた、澄みきった空気の匂い。

物音ひとつしない。
風がなく空気の制止したような室内は、時間が止まっているような、空間がアルミホイルのように薄く引き延ばされているような、妙な感覚がある。
祭壇も偶像もないのだから、これは、神殿ではないのかもしれない。祈る相手のいない神殿ほど、矛盾したものはない。
辺りを見回していたときに、ばたばたと石を叩くような足音とともに、扉が弾けるように開かれた。

「勇者様！」

奇態な掛け声によって駆け込んできた人影は小柄で首があり頭があり手足があり、耳目鼻口を持っていて、つまるところ一瞥（いちべつ）した限り人間と判じる要諦（ようてい）を満たしているように思える。
さらに言えば、ゆるりとした白い貫頭衣を纏（まと）った小さな体は、撫で肩気味で、柔らかくくびれた印象を与え、なおかつ緩やかにウェーブを描きながら伸びる赤みがかった茶髪が、ふわりと背に被っているところから、おそらく女性であろうと推測できる。
ほっそりと曲線を描く顎やすっきり通った鼻梁、きれいに対称を作る弓なりの眉の位置から見て、だいたい成長期の終わりくらいの年齢だろうか。
しかし、ただ一点。
くりりと睫毛の伸びた円らな瞳の色が、宝石のような緑色、いや、翡翠色をしている。

「勇者様」

少女は目があった途端、くしゃりと泣きそうな顔を浮かべ、こらえるように深呼吸して神妙な表情を作った。

「どうか、私たちの世界をお救いください」

言葉は染み入るように音のない石造りに響き、溶け込んでいった。

少女の名はミルシエーラと言うらしい。それがこの世界の古い言葉で生命の神秘を意味するということを知ったのはずいぶんあとの話だ。

シエーラ、なところが、どことなくヨーロピアン的な風格を帯びている。

かといって北欧系の顔立ちをしているかと言えば微妙で、ヨーロッパ系コーカソイドほどまで顔の彫りが深くない。逆に言えばアジア系にしては彫りが深く、鼻筋がスッとしている。

東欧系、というよりむしろ、ハーフまたはダブル、とでも呼ぶべき印象だった。

純日系にして基本的に日本人の大和顔しか見たことがなかった俺にしてみれば、何か一つ隔絶したような距離感が拭えず、微妙な居心地の悪さを感じている。

具体的に言えば、ガイジンは街ですれ違うかテレビや銀幕の向こうにいる程度の存在であって、身を持って接する対象ではなかったはずだ。

ミルシエーラが覗き込むように俺の顔をうかがう、その視線から逃れるように顔を背けた。

特に俺が居心地の悪さを覚えるのは、ひとたび見ればしばらく目が離せなくなりそうなくらい鮮やかな、翡翠の瞳だった。

その奇妙な深い色合いは、作り物めいた美しさを持ちながらも、まるでそうであることが正しい姿であるかのように、ある種の調和を持って、少女の瞳の中で感情のまま気遣わしげに揺れる。

「勇者様？」
「……それもだ」

俺は痛くもない頭の痛みをこらえるように、側頭部に指を添える。
頭が痛い、非常に難解な事象が我が身に襲っている、というジェスチャーを取ることで、相手以上に、自分の意識に現実の再認識と分析を促す。
ミルシエーラは困惑したように、あるいはもっと切迫した悲哀な何かを内に秘めたような、そんな表情で手を伸ばしかけて固まっている。

「あの、何かご気分でも……。お水でもお持ちしましょうか」
「水か。水は要らない。そうだな。とりあえず、外の空気を吸わせてくれ」

脇をすれ違って、彼女の入ってきた扉から出る。
屋外かと思っていたが少し違っていた。
裂けた大地の隙間に埋め込むように、あるいはむしろ、山肌を引き裂いたような、そんな崖道が伸びている。
泥もない磨かれたごろごろとした岩肌を横目に、遥か十メートルはありそうな高い崖の隙間を歩いていく。

崖によって縦に区切られた大地が広がっているのが見える。
見た感じ、この神殿は結構高い山に築かれているようで、山麓の森とそれを横切る大きい川、そこから分かれて伸びる支流と支流から土手を作って水を引いた用水路、貯水槽、そして広々と拓かれた田畑と集落が見える。ざっと数えるでもなく見た感じ、百に満たないくらいの世帯数、ざっと人口五六百人といったところだろうか。

その果ての山脈と稜線の中に、明らかな異物があることに気づかなかったのは、まず第一にそれがあまりにも遠かったからだ。
青く霞み、雨や霧、いや空が曇ればそれだけで見えなくなってしまいそうなほどだった。
第二に、高い位置にあり麓から視線を向けていったためになかなか気づけなかったからだ。
そして第三は、逆説的な話になるが、それがあまりに不自然で現実離れしていたため、本当にそこにあって自分の目に見えているものであると意識的に正しく認識できなかったからだ。
机に置いてある見えている鍵を探して、机に散らかした本をひっくり返しているような、あの感じ。

「あれが、悪魔の……いえ、魔王の住む天の塔です。勇者様」

追いかけてきていたらしいミルシエーラが、隣に立ち、俺と視線を同じくしてつぶやいた。
頭が痛い。
考えるべきこと。

「なぜ、俺が勇者などと呼ばれるんだ？」

ミルシエーラは俺を見て、真面目な顔で口を震わせる。

「魔王が現れたとき、必ず勇者様もまたご光臨なされます。あの神殿に現れなさった貴方こそ、世界を破滅から救ってくださる勇者です」

真剣な顔で突飛なことを語る。
俺は天突く針のような塔に目を向けた。
遠く霞む、薄い線のような、天の塔。

仮に。
仮に俺が勇者だとするなら、その要件として、魔王が生まれていなければならない。
すなわち極論すれば、魔王を産み出したのは勇者だと言える。

あの夢を思い出し、無意識に胸に手を当てていた。
心臓を突かれた痛みを俺は忘れていない。
痙攣するように、爆発するように、それでもただ生きるために、血液の循環を保とうと胸骨の中で暴れまわって血を噴いた心臓。
体内に血が溜まり、内臓が圧迫されていく痛み。
瞬間的に血が足りなくなり、酸素を失って意識が暗くなり、血圧の急変によるショック症状のように、俺は即死したのだ。
それが確かだとすれば、俺がここにいるのはあの夢の経緯であり、だとすればここに立っているのは作為的な結果だ。

俺が勇者であるなら、俺が勇者であるために、魔王が生まれ、世界が滅ぶ。

「勇者様」

沈思していた俺の小指と人差し指の根元をつまむように、控えめに、しかし放すつもりがないように、ミルシエーラは俺の手を取った。

「どうか、世界をお救いください」

その瞳の真摯さに反比例して、目の前の非現実を白けた目で見るように、俺は掴(つか)まれた手の儚げな感触を見下していた。
俺がここにいるのが作為ならば、この筋書きもまた、作為に違い

ない。勇者のために世界が滅ぶのは、勇者に救われるためなのだから。
しかし、そうだとしたら、それは決して滅びではない。
茶番だ。
遠大なマッチポンプに過ぎない。
――ならば、俺が滅ぼすのもいいか。
考えて、微かに笑った。
事前の了解なく役者に演じさせる舞台に、破綻を予測しない演出家はいない。
それでも行うとしたら、破綻させるためか、破綻した上で何事かを行うためだ。
「分かった。俺はあの塔に向かう。その未来を変えよう。どうすればいいか、知っているなら、教えてくれ」
この世界は、この筋書きは、一体なんのためのものだろう。
ミルシエーラは生真面目そうな気負った表情で、はい、と声を震わせた。

2：　帯剣する

誰かの思惑通りに動くなんて、我慢ならない。

「それは、君がいつもしていたことじゃないのかい？」

そう。

自分がそれを望んでいないと分かっていながら、最期まで、やめることができなかった。

本当の、最期まで。

だから、俺は。

ミルシエーラが俺を案内したのは、神殿から真っ直ぐ麓へ延長線を引いたような場所に位置する岩屋だった。

岩山が終わり森の始まる境目付近にそれはある。壁が割れたような入り口の周りは、すでに森に埋もれている。

入り口はそこが聖域であると主張するように、赤い紐が渡されていた。ミルシエーラが軽く手刀を切って頭を下げてから、その紐を外す。

くりぬかれたように伸びた穴は、奥で広がっており、鍾乳洞のようなツララ状の鍾乳石や石筍（せきじゅん）が並んでいた。

その中を、まるで道のように、というか間違いなく道になっている蛇行した岩が伸びている。五十センチ幅ほどのそれは、かすかに湿り、いかにも滑りやすそうだ。道を少し逸れれば目測一メートルの深さがある底にまで滑落するだろう。

湿った冷たい空気が満ちる薄暗い空間を、静かに見据えていたミ

ルシエーラは、俺を振り返った。

「この先に、魔王を打ち破ることができる聖剣がございます。その剣は勇者以外に持つことを許されないとされ、事実、未だかつて誰も抜くことができず、御神体としてただ祀られるままとなっていました」

どこかで聞いたような話だ。

しかしアーサー王は魔王なんかとは戦わなかったはずだがなあ。

道の先を眺めていると、ミルシエーラが気まずそうに一歩下がった。

「この先は一人で行くほうがいいか？」

「お願いします。……私では、その、滑り落ちそうで」

ばつが悪そうに顔を伏せたまま、恨めしそうに細い道を見ている。

まあ確かに、滑りやすそうな道ではあるが。

突っ立っていても仕方がない。さっさと、けれど慎重に、道を歩き始める。

剣を抜くことが勇者の選別ということは、ここで俺が抜けなければ、勝手に終了ということだ。ミルシエーラには悪いが、その凡庸な結末は、むしろ当然の帰結と言えるかもしれない。

勘違いし妄信した馬鹿な女と、祭り上げられるままに己の器を履き違えた愚かな男が、粋がって神話に挑み、あえなく沈黙する。

もしくは、誰もが抜けるつまらない剣に空想を重ね、憐れな最期を迎える。

ただの詐欺であれ、馬鹿な妄想であれ、俺が本当に勇者であることよりは、よほどありえる話ではある。

しかし。

道の終わりは石筍に突き当たって終わった。
足元に、真っ直ぐな直剣が刀身の半ばほどまでを盤座に埋め、その古びた柄をこちらに差し出すように伸びている。
その剣身はミルシエーラの語ったものとは思えない、研ぎ澄まされた輝きを持っている。

「嫌な金属光沢だ」

意識的に顔をしかめた。俺はこういうのに胸を突かれたんだよ。
無造作に手を伸ばして柄を掴む。
ツカだけに。
風化した表面の布が手の中で崩れ、湿った縫込みがひたりと指に吸い付いた。
力を入れると、まるで鞘走りをするような音とともに、その剣はいともあっさりと引き抜かれる。
洞窟内の薄暗さのなかにも関わらず、まるで自ら発光しているかのように、かすかな光をかき集めているかのように、その剣は青く輝いていた。

このお膳立てが正しいなら、筋書きは、とても単純なものであるはずだ。
古来より、首を刎ねれば災禍の象徴は潰える。
故にこそ、剣というイメージは、剣を突き立てるという死のイメージは、筋書きの最後を飾るだろう。

「抜けたはいいが」

さて、と戻ろうと振り返ったところで思い当たる。

「抜き身では危ないよなあ」
うっかり手を滑らせたりしないよう、湿った柄を握り直す。
ミルシエーラの元まで戻ると、彼女は俺の手元を見て、かすかに安堵したように表情を緩めた。
そして俺を外に促すと、腰の布の影に隠していた巾着袋から竹笛のようなものを取り出した。
ぴゆいっ、と鳥の鳴き声のような甲高い音が鳴り響く。大きさの割にとんでもない音量だ。笛の音は山彦のように反響しながら、遠く空まで広がっていった。

「それは？」
「走狗（そうく）を呼んでいるのです」
「走狗？」

走狗というのは、一般に他人の言うなりに奴隷のように働く者を揶揄するか、原義通り狩猟犬という意味がある言葉だが、この状況で出てくるには少々場違いな単語ではある。
ミルシエーラは俺が理解に及んでいないことを見ると、ほんの少し焦った感じで言葉を継ぎ足した。

「私たちを乗せて速く移動させてくれる生き物です。彼らに乗らないと、とても村まで行けません」
「なるほど。つまり馬か」
「え……馬のような臆病な動物は、乗り物には適さないのではないでしょうか」
「それでも力は強いし足も速い。鍛えれば多少のことには動じない、勇敢な個体になるものいる」

と語ってみて、ふむと顎に手を当てる。まさか馬に相当する役割を持てる動物を、家畜化しているのだろうか。するとそれはどういう動物なのだろう。

考えていくらもすることなく、ミルシエーラが顔を上げた。

同時に彼女の向いた方向から足音がして、茂みから巨大な影が飛び出す。

わっと漏れそうになった声と一緒に息を呑んだ。

「これが走狗です。賢く勇敢で、力強い動物ですよ」

走狗、というよりも狼のようだった。顔つきはシベリアンハスキーのようで、毛並みは灰色をしている。保護色の観点から考えると、本来はもっと北の動物なのだろう。

しかし異様なのは大きさで、親しげに顎を撫でるミルシエーラの手が肘の高さにある。

体高は一メートル半、体の長さは尾を除いても二、三メートルはある。一般的な乗用車ほどの大きさの犬が、轡（くつわ）と鞍（くら）と鐙（あぶみ）を取り付けられているのだ。

しかし、普通の犬とも少し違和感がある。

やや細く胴が引き締まり、足がすらりと長い。おそらく一般的な肉食獣のように短距離の速さで仕留めるのではなく、長い間追い回し、獲物が疲れたところを仕留めるような狩りをするタイプだ。

本来の狼は、夜陰に乗じて視界のない草木の影から狩りをするからこそ、鼻を利かせて獲物を探るのだ。狩りかたの異なるこの走狗は、目と耳が利くのだろう。

「……これに乗るのか？」

「はい」

ミルシエーラは轡から垂れる手綱を取って、俺を振り返った。

その彼女に、剣を見せる。
あ、という顔でぽかりと口を開けた。
馬であれ犬であれ、抜き身の剣を持ったままでは乗れないだろう。

「大丈夫です」

しかし、ミルシエーラは微笑んでうなずいた。走狗の青灰色の瞳が俺をじっと見つめている。

「勇者様なら、気をつけて乗れば、怪我しませんよ」

走狗が嫌そうにミルシエーラを見た。
さあ、とばかりにミルシエーラは俺に手を差し伸べている。

「ミルシエーラ。こいつに名前は？」
「はい。ファス、と言います」
「そうか。ファス」

名前を呼ばれてファスが俺の目を見た。
その瞳を見つめ返し、真剣に、言う。

「落としたらごめん」

村まではだいたい三十分ほどで着いた。流れていく景色を見た感じ、平均時速は四十キロほどだろうか。軽く跳ねるようにファスは大地を駆けていった。その走りぶりはまさに、尻が痛い、といったところか。乗り慣れないと相当な苦痛になりそうだ。

そしてその村は、高い獣防止用の柵に囲まれた田畑を長く突っ切って、用水路の水を溜めて農業と下水の二つに分かつ貯水池を越えて、木の板で作った住宅の並ぶ村だった。

基礎は石を固めて作ってあり、窓は木枠によって組まれている。屋根の角度からしてあまり雪が降るわけでもなさそうだ。

また窓や木の板はしっかり隙間なく加工されており、土木技術もそう低くはないことをうかがわせる。

見たところ薪がないため、燃料は恵まれているのだろう。

大きな家に納屋が併設されているようなこともなく、私有財産に関してはそれほど厳しい統制がなされているわけではないらしい。同時に防犯意識もゆるく、家の戸が開け放たれたままになっている家もある。

共同体意識が強いのかもしれない。人口と比して考えると、たいへんに治安のいい村だと言える。それは裏返しに規律の存在を匂わせるのだが、為政者によるものか慣習によるものかまでは分からない。

今はゆっくりと歩いているファスを、桶を持っている女性が不思議そうに見上げていた。

桶を持っているということは、上水道までは完備されていないのだろうか。しかし技術力から見て、川の水という衛生面において不安の残る水源を用いているとは思えないため、おそらく井戸はあるのだろう。

衛生といえば、家畜小屋の悪臭がしないが、運搬はどうしているのだろう。村道はファスが通れる広さがある以上、家畜を用いているだろうとは思うが、轍（わだち）がない。

波打つような足跡からして、おそらくは走狗のような動物の背に括り付けて運搬しているのかもしれないが、馬車のような牽引器具なしに使うには限界がある。

村の中で速く走らせる必要はないし、まして勇敢である必要はない。走狗とは別の、そういう労働に向いた家畜がいると考えるべき

だろうか。

「勇者様」

「ん、ああ」

声を掛けられて、ミルシエーラを見る。彼女の視線は村の中央にある広場を、いやその正面にある大きな屋敷を見ていた。

ファスが屋敷の前に横付けするように立ち止まり、体を伏せる。ミルシエーラにうながされて、慎重に、剣先の動きに注意しながら足を滑らせないように鐙を踏んで下馬する。いや下犬か？

俺を下ろしたミルシエーラは、するりと手馴れた身のこなしでファスから降りる。格好いいじゃないか。

ファスは二人を下ろすと首を回して体を揺すり、勝手にどこかに歩いていってしまった。ミルシエーラはそれを見送ることすらせず、頭を下げて屋敷の戸を示した。

「こちらにお出でください。ご足労を掛けて申し訳ございません」

「……なんだかんだ、かなり言うタイミングを逃したんだが、いいか」

「は、なんでしょうか」

顔を上げて、不思議そうに首をかしげる。その純粋な翡翠色の瞳から目をそらして、口元あたりに目をやる。俺は違和感がありながらも、それどころでなかった頼みをようやく口にする。

「その勇者様って呼ぶのをやめてくれないか。自分がとても頭の悪いダメな存在に思えてくる」

「え……そ、そんなことは決して」

「俺は穂村忠志だから。姓でも名でも好きに呼んでくれ。ただし、勇者も様もやめること」

タダシだけに。
こっそり心で付け加えた。
戸惑うように視線を泳がせて、俺の全身と広場中の景色を眺めて回ったミルシエーラは、おずおずと口を開く。
「で、では、穂村忠志様……？」
「フルネームはやめて」
速攻で頭を下げた。
「すまん。フルネームは勘弁してくれ、病院にでも呼ばれてる気分になりそうだ。あと様付けもやめ」
「は、はい！　すみません！　では、タダシ……ど、殿？」
「どの、殿かー。なんで疑問系だよ。どうしても尊称を付けないと気が済まないのか？　いいじゃないかせめて”さん”とか”くん”とか”ちゃん”とかで。いや待ったやっぱ”ちゃん”は無しだ」
「も、申し訳ございません。……あの、”様”は負かりませんか」
そう来たか。
「様付けは大仰だからやめてもらいたい」
「しかし、その、私も神子（みこ）として、勇者様の尊称を省くような不敬は、ちょっと」
「俺がいいと言っているのにか」
「はい。過度に礼節を軽んじるわけには参りません。ですので、どうか、”様”までお願いいたします。こちらとしてもぎりぎりのところで」
「うーむ」
「どうかどうか」

「仕方ない。様付けでもいい」
「は、ありがとうございます、忠志様」
「やっぱりむず痒いな」
「申し訳ございません」

へこへこと頭を下げるミルシエーラ。
いったい何の話をしていたのだったか。

「あ。忠志様、こちらへお願いいたします」

あ、てお前。
ミルシエーラはまるで忘れてなんていませんよ話が終わったらこうするつもりだったんですという顔で、屋敷の扉を開いて、俺を促した。

屋敷の中は意外に狭い。
というか、玄関がなく、いきなり応接間になっているのだ。
卓袱台とクッションが打ち付けられた椅子が並ぶ部屋だ。壁には赤い旗のようなものが下げられている。
調度品はおろか机のほかには家具もない。別に出してほしいわけではないが、お茶請けも出さないのだろか、応接間なのに。
奥の壁には、旗に隠すように扉があるが、あれは通るときに邪魔ではないだろうか。

唯一の家具であるところの机には、老人が既に着いていた。ミルシエーラと同じ貫頭衣を纏った手足は筋張り、肌の出ているところはシミにまみれた、いやあ今ちょっとそこの墓地から出てきたんですと言われても、納得できそうなくらい老いたお爺さんだ。
ミルシエーラが俺の横に立って、老人に頭を下げる。

「長老、お連れしました」
「ぅああ」
口を動かすのも億劫、というように、半ばうなるような声で答えた。
「剣を」
じろりと目だけを動かして、長老は言う。
ミルシエーラは彼の代わりに俺に頭を下げて補足した。
「申し訳ありませんが、ご無礼を承知で、剣を検(あらた)めさせてやってはいただけませんでしょうか」
「ああ、どうぞ」
剣を渡そうと柄尻を向けて差し出すと、まるで逆に刃先を突きつけられたかのように、ミルシエーラは体を引いた。長老も目を剥いている。
「それは勇者様以外に持つことはできません。どうか、そのままで結構です。あいえ、やっぱり少し、彼に見えるようにお願いできますでしょうか」
なんというか、敬意を持っているのかいないのか、微妙な感じになってきた。不自然に敬意を持たれ続けるのも居心地が悪いから、望むところでもあるけれど。
横に捧げ持つように剣を持ち、長老の前に見せる。
「……ぉああ」

うなるようにうなずいて、長老は震える手で合掌し、頭を下げた。

「……ううしゃよ、どうか、どうか、世界を、救いたもう」

「分かっています。そのために、私はどうすればいいのですか？」

あまり刃物を見えるところに置いておきたくないので、腰に下げるような位置に引き下げてから、問う。

枯れかけた老人は、言葉を発するのも険しいというように、ゆっくりと声を絞った。

「剣だけでは、魔王は、打ち払えません。呪文を、刻む必要があります。魔女を。北の、峯禄山の切り裂け谷にいる、黒の魔女に、頼みなさい」

峯禄山、切り裂け谷、黒の魔女。

ここに来て厄介な言葉が一挙に出てきた。

眉をひそめるのを堪えて、今はただ、その名を覚えるに留める。

「そうすれば、必ずや、魔王にも、勝てましょう」

ふう、と長い息を吐くように、長老は話を終えた。

そのまま目を伏せてしまって、これはお迎えが来たか、と不安に思っていたら、彼はもう一度頭を下げた。

「どうか、ミうシエーラを、頼みます」

「はい」

答えた俺の肩を、ミルシエーラがそっと引く。

彼女の翡翠の目と合わせ、促されるままに、長老の前を辞去した。

「北を目指せばいいのか？」
「ええ、忠志様」

広場は破滅を前に生き急ぐように人々が行き交い、通りに市場が開かれ、角の長い牛のような動物に荷を背負わせ、村は動いている。
峯禄山、切り裂け谷、黒の魔女。
山谷は試練の象徴。魔女は賢者としての役割を負う、知恵の象徴。
しかし　峯の字は峻険な高さを暗示し、切り裂け谷という不穏な名が不吉を感じさせ、おまけに魔女の号が黒と来た。
分かりやすいくらいの、険しい道のりを予感させている。
青い空の日はまだ高く、正午にも至らない。

3：　遭遇する

「象徴とはすなわち意味であり価値だ。その先に答えがある。それがどんな形のどんなものであれ――必ず」

腰に提げた鞘に収まる聖剣が、ファスの走る衝撃に合わせて揺れる。

ベルトがぶちぎれて落ちやしないかという不安は拭いきれないが、ひとまずは安心してミルシエーラにしがみ付いていられる。いやもちろん直接がっちりホールドしているわけではなく、彼女の後ろから覆いかぶさるように手綱を一緒になってつかんでいるだけで、確かに体に接触している意味で言えば役得感はある。

しかし、変な敬語を使われているせいか、はたまたなまじっか美人すぎるせいか、ミルシエーラのことをいまひとつ異性として見れていない。頼れる同行者といった感覚だ。実にそのまんまである。

「忠志様。お疲れは出ませんか？」

「ああ、いや。大丈夫だ」

答えつつ、ちゃっかちゃっかと爪を立てて大地を疾駆するファスの背から、辺りを見回す。

村は遥か後方に消えて、今はところどころ土の露出した背の低い草原を突っ切っている。方角は俺には分からないが、北に向けて走っているのだろうと思う。特に犬は濡らした鼻で方角を悟れるというし。

走る先には峻険な山脈がそびえている。

「忠志様。峯禄山についてはご存知ですか？」
「いや。全く」

ミルシエーラは軽く頷いた。ファスは利口なので、車と違ってただまっすぐ走るだけならば、面倒を見る必要がない。地面を全く見ずにいると、唐突にある窪みを飛び越える衝撃に舌を噛むくらいか。

「峯禄山は、天の塔を遮るようにそびえる灰色山脈の一番高い山のことです」

天の塔は峯禄山の裾野、灰色山脈の盆地に建っているそうだ。灰色山脈はほとんどが岩山で、年中雨や霧が立ち込めているから名付けられたらしい。

「灰色山脈には巨大猛禽鳥（ロック）や骨蜘蛛、毛虫鼠など危険な動物が多く生息しています、が。取り分け危険なものとして、灰色山脈には、死が生きていると言われています」
「死が？」
「ええ。分かっていることは、ただ、それに出会ったものは皆死んでいる、ということだけです」

また恐ろしげな伏線を撒いてくれたものだ。
こっそりとため息をついて、逆にこちらからフラグを返す。

「じゃあ、俺たちが最初の生き残りだな」
「ふふ。ええ、そうですね。忠志様なら、きっと」

ミルシエーラはいつの間にか入っていた肩の力を抜き、少し嬉しそうに応えた。
思う。

立てるフラグを間違えたかもしれない。

と、ミルシエーラが手綱を引いてファスに合図した。ファスは地面を蹴るのをやめて四足で歩き、近場の木陰に身を寄せる。

「ひとまず、ここで休憩にしましょう」

「まだ大丈夫だぞ」

「疲れてから休むのでは遅いのです。休憩は体が疲れを感じる前に取らないと、回復するのも遅くなりますから」

ずいぶんと慣れたように語り、ひらりとミルシエーラはファスから降りた。俺に手を掲げて手を貸そうとしている。少し迷ったがありがたく手を借りて、どっこらとばかりに足を上げてファスを降りる。

「あたた。鞘が引っかかった。ありがとう」

「いえ」

鐙というのはふらふらしていかん。

ミルシエーラは淡く微笑んで、ふわりと木陰に腰を下ろす。

「お座りになってください。今水をお出しします」

体に巻きつけるようにして抱えている背嚢（はいのう）を広げているミルシエーラを見下ろす。

彼女は今、長い茶髪をマントのしたに隠し、なめした毛皮の旅装に身を包んでいた。暗褐色のチョッキに白いシャツ、人差し指の爪ほどの赤いルビーを金細工で飾ったネックレスを下げている。ボトムスはパレオのような腰巻こそあるが、黒いカーゴパンツに履き替えている。まあ走狗に乗って走り続けるのだから当然だ。

水筒に注いだお猪口のような量の水を受け取る。口を湿らせるように舐めながら、鞘に巻きつけたベルトを探る。

「忠志様は、帯剣なさるのは落ち着きませんか？」

「そりゃあ、こんなものぶら下げるのは初めてだからな」

重さとしては本を多めに詰めた肩掛け鞄ほどだが、他にも食料や水などを詰めた袋を腰に巻きつけている。

だいたい俺の衣服そのものも、ごわごわしたシャツとやたら厚手のベスト、そしてミルシエーラのものより厚手のなめし皮で作ったジャケットを着させられ、袴のような緩いパンツに、図太い腹巻のようなベルトをつけて先の袋と鞘の下げ緒の一つを結び付けている。鞘は肩からもたすき掛けに吊っており、腰にも巻いているのは予備というか単に安定させるためだ。

象徴的な筋書きとは裏腹に、ディティールの凝った話ではある。筋書きといえば。ファスに水を与えているミルシエーラに目を向けた。

「ミルシエーラ」

「はい。なんでしょうか」

「お前は神子とか言ってたな。どうしてこの旅についてくるんだ？危険だろ、たぶん」

「どうしてもなにも、私は初めからそのために神殿を奉り申上げていたのです」

「それは……役職、というか、家系？　使命のようなものか？」

「そう、ですね。神子を奉じたときより私は勇者様のお供として在りましたので」

神職のようなものか、と予想を立てるが、その割には少し違和感がある。

信仰を血肉の一部として暮らす者独特の、非信仰者視点では少々超越した合理性を基準に置いているような物事の考え方をしている。しかしその割には、信仰者視点から考えようにも思想が見えない。

「ああ、そうだ。思い出した。崇め奉る神のない神殿を祀る神職が居るわけがない。というか、神の居ない神殿はおかしい。ミルシエーラ、お前はなにを奉っているんだ。なぜに使命を奉じるんだ」

「なに、と申されましても……ただ、魔王を対抗する勇者様にお仕えすることは、当然ではないでしょうか」

ミルシエーラは俺の疑問がさっぱり分からないという顔で困惑していた。

確かにな、彼女の言には納得できるものがある。世界を滅ぼす魔王がいて、対抗しうる勇者がいるなら、その勇者を支援するのは当然だろう。

しかしどこか、腑に落ちない。

胸焼けでもしているような、喉に小骨が引っかかったような、微妙なもどかしさが胸を満たす。

「そろそろ参りましょう、忠志様。夕に差し掛かるまでに進めるだけ進んでおかなければ」

「ああ」

ファスは呼ばれもせずに這うように体を寄せて、片目だけでじっとこちらを見つめる。本当に賢い。

馬上いや犬上から手伝ってもらって再びファスにまたがり、ミルシエーラの背に身を寄せる。手綱の簡単な合図だけで、ファスは再び身をくねらせるように走り出す。

足のしたで躍動するファスの力感を足で感じながら、考える。

状況も、展開も、筋書きという作為の影が見える。

ミルシエーラ、お前は、何者だ。

赤く染まり始めた空の果てに、天の塔は黒くそびえている。

「ファス」

ミルシエーラはファスに声を掛けながら手綱を引いた。先ほどと同じように、ファスは足を緩めて立ち止まる。

「そろそろ夜営の支度をしましょう」

「ああ、分かった。でも」

「どうされました？」

「いや、夜営なんてしたことがないから、何をしたものかと思ってな」

「それでしたら、私がお教えいたします。一緒にやりましょう」

ミルシエーラの手伝いをするような形で、夜営の準備をする。とはいえ、やったことと言えば、燃えやすそうな燃料を集めたり、石を拾って竈を作ったり、燃え移らないようにいくらか草をむしったくらいだ。寝床はない。

食料だと思っていた木の実が、潰して絞った油に火をつけるものだとは思わなかった。盗み食いしなくてよかったと思う。

そうこうしているうちに日が沈んでいたらしく、辺りは夜になっていた。

明日は日の出前から出立するというので、食事を取ったらすぐに眠るつもりだ。

「食事ができましたが……どうされました？」

「ん、ありがとう。大したことじゃないさ」

固形スープを溶かしたポタージュと固めたパンが夕食だ。わざわざ貴重な水を使ってスープを作るのは、栄養バランスという意味よりも、それに浸さなければ固すぎてパンが食べられないからという側面が強い。

器の縁にパンを置いて柔らかくほぐれるのを待ちながら、もう一度、空を見上げる。とっぷりと黒一色に塗りつぶしたような夜空には、月がない。

月のない夜は、加護がない闇を――つまり、不吉を暗示する。

今夜、なにかあるかもしれないな。

「忠志様。あの……ぶしつけなことをお伺いしてよろしいでしょうか」

ミルシエーラが遠慮がちに尋ねてきた。

「もちろん。つうかそんなふうに遠慮するなよ。敬語やめちまえ」

「い、いいえ、そうは参りません。私は神子なのですから」

「……神子って、いったい、ああいや、やっぱりいい。後でいい。何が聞きたいんだ？」

「い、いいえいいえ、私などの質問より忠志様の質問のほうが！大したことではありませんから、本当に！」

「まあまあ、順番なんて些細なことじゃないか。早く聞きなさい」

言いながら、下手にミルシエーラがへりくだるから、本当に俺のほうが序列が上のように錯覚しそうになってきている自分に気づいて辟易した。なんて単純なんだ俺は。参ってしまう。

「私は、ただ、その。勇者としてお出でになる以前、なにかしてらっしゃったのですか、と」

「ああ、そういうのか。俺はここと全く違う文化のところで一般人として慎ましく生きていたよ」
「違う文化……ですか」
「そう。日本つってな、いやそもそも日本は地球って惑星の島国で、惑星ってのは宇宙をめぐる星のことで」

言葉を重ねれば重ねるほど理解から程遠い表情になっていくミルシエーラを見て、口をつぐんだ。

「……まあ、あれだ。いろいろ効率化して、見た目は変わっちゃいるが、そう変わらんだろうなあ。いや、違うと言えば全く違うんだが」

曖昧なことを言ったせいで、ミルシエーラはますます混乱したふうな顔をしている。具体的には、と指折りしながら例示する。

「車って言って、乗ったひとが操縦するままに走狗より速く自走してくれる箱があったり」
「えっ、そんな便利なものが」
「冷蔵庫って言って、食べ物を冷やしたり凍らせたりして鮮度を守ったまま保存してくれる箱とか」
「ええっ、そんな便利なものが」
「電子レンジって言って、中に入れた食べ物を熱々に温められる箱とか」
「ええーっ、そんな便利なものが」
「エアコンって言って、空気を冷やしたり暖めたりできて部屋の温度を快適に調整してくれる箱とか」
「ええーっ、そんな便利なものが！」
「家って言って、中に入った人を風雨や外敵から守ってくれる箱とか」

「ええーっ！　そんな便利なものが！」
ぱくんと口を閉じて、ミルシエーラは変な顔をした。
「家はこっちにもありますよ」
「と、思うじゃん？　マンションって言って、何十世帯もの家族が住める、高い塔があるんだよ」
「ええええーっ！」

ファスがハッと頭をあげた。
あまりにもいいリアクションをするミルシエーラに、声をあげて笑う。そりゃあ多少演技入ってただろうが、いちおう驚いたのは本当らしい。ミルシエーラは顔を赤らめて首を縮めていた。
騒ぎが大したものではないと思ったらしいファスは、うるさそうに顎をバツの字に組んだ前肢に乗せた。
「”でんしれんじ”と”えあこん”は本当に羨ましいですね」
「他だってありゃあ便利だぞ。車は運転したことはないけど」

パンをかじる。少しふやかしすぎたかもしれない。
「それじゃあ次はこっちの番だ。そもそも勇者だか魔王だかってのは、なんだ？　昔からいるのか？」
「はい。詳しい伝承は残っていませんが、お教えさせていただいたようなことは古くから世界に伝わっております。特に、私の村は近くに剣が安置されていたので、おそらく世界で最も詳しく伝承を残していると思います」
「そうか」

つまりは、いくら取り繕うとも、所詮は伝説上のものでしかない、

と。

「魔王はどうして世界を滅ぼすのかとか、分からないか？」

「そうですね……あの天の塔は、突如高々と現れましたが、実は、あれで完全に現れたわけではないのです。完全に姿をあらわして天の塔が真に天に達したとき、大地は割れ、海は山を沈め、空は落ち、日は姿を消して、瘴気が満ち、あらゆる生き物が生きられない世界に変わる、と言われています」

「天の塔が、真に天に達したとき……？」

俺は思わず、空に視線を向けてあの高々と天に消える塔の姿を探してしまった。

当然、月のない夜の空にその姿を見つけることはできない。

「勇者が魔王を滅ぼすと、天の塔は光の柱となって掻き消え、世界は安寧を取り戻す――そう、伝えられています」

「なるほど、ね」

天の塔と言えば、思い出すことは、バベルの塔だ。

思えば、走狗のような怪獣の存在しうる異世界において、日本語が平気で通じるのは、ある意味であの塔が存在しているからかもしれない。逆説的にはあの塔がある限り、言語において意思の疎通に困ることはなかったという話だったわけだし。

そんな与太話は差し置いても、世界の滅ぶ理由だ。

本当に地球上に天突くバベルの塔が存在しうるとしたら、どうなるだろう。

当然、ねじれに耐え切れず構造的に塔が破壊されるだろう。もしも耐え切れるとしたら、慣性の法則に基づき、てこの原理もあいまって、自転に対する急激なブレーキとなる。

しかし、そもそもが天に至るほどの塔だ。
壊れて降り注ぐ質量は、隕石として世界を危機に陥らせるには十分だろう。あるいは本当に自転の速さを変えてしまうとしたら、世界が滅ぶことになんの疑問もない。
問題となるのは高さの成長スピードだが、これは天の塔が突如現れ、そのときから天辺が見えなかったのだから、相当なものがあると考えていいはずだ。
天というのがどこを指しているのかは分からないが、単純に神の世界すなわち現世の外を指しているとして、宇宙の果てを貫く長さとでも考えておく。ウン百光年彼方である。正直もう見えない時点で塔の長さはどうでもいい。
思ったよりも、ロジカルに世界の終末を迎えるらしい。
その割に対抗策が剣、というのも不思議な話だ。そもそも塔によって世界が滅ぶのに、魔王を倒せば世界崩壊が回避できる、というのも不自然ではある。

「魔王ってのは、いったい何なんだ？」

単純に考えれば、破滅そして死の象徴だ。
だが、そう割り切れない何かがある。ピースを欠いた結果、別の答えを見ているような。

「忠志様？」

ミルシエーラが怪訝そうな顔で、俺を覗き込んできた。いつの間に隣にまで回りこんでいたのだ。
思わず仰け反って驚いてしまった。

「お召し上がりになりませんと、スープが冷めてしまいますよ」
「あ、ああ、おう」

いかんもったいない、と慌てて平らげる。ミルシエーラがおかしそうに微笑んだ。
ファスは呆れたように、でかい口を開けてあくびをしている。
犬のくせに、本当に賢いやつめ。
と、見ていたら、ファスがびくりと上体を飛び起こした。
立ち上がり、周囲をうかがいながら歩いてくる。

「ど、どうしたの、ファス」

食器を片付けていたミルシエーラが、目を丸くしてファスを見る。
耳も鼻も首も、しきりに動かして、周囲を警戒している。焚き火の明かりが届く外は、暗幕が被されているかのように暗い。そこに不快な何かがあるかのように、牙を剥いてうなり始めた。
歩み寄ってきたファスに寄り添うように、全員集まって立つ。

「なんだか、嫌な予感しかしないな」
「は、はい……」

何が起こるか分からない。
武器があるのに使わないのは落ち着かない、早速抜かないと危ないか、と柄に手をかける。
しかし現代人の価値観が、危険物を易々と握ることに躊躇を生じさせた。
重たい金属板をぶつけたような低く力強い咆哮。
ファスが闇に吠え立てる。

その瞬間、まるで宵闇から染み出したように、人影が闇を掻いて現れていた。
黒紫に変色して波打った肌、腫れたような唇、隈を塗ったように

黒く落ち窪んだ眼窩に、白く濁った瞳。
腫れたうえに肉がずれているのか、奇妙に歪んで膨らんでいる手足。
襤褸(ぼろ)が風をはらむたびに煽られる、不快な甘ったるく苦酸っぱい腐臭、死臭が漂っている。

死人だ。
声帯を雑巾絞りのようにねじったままで無理矢理に声を出させたら、こんな音が出るのではないかという、怖気のするような叫びをあげて、死人は駆けてくる。

考えるまでもなく、魔王側の存在だ。
違うとしても、こんな存在そのものが罪のような冒涜的な物体を殺傷するのに、躊躇いも呵責もない。
というか、こんなものに傷つけられたら絶対に病に罹る。

「ぐっ、く!?」

剣を引き抜こうとしたが、柄が何かに引っかかって抜けない。
ミルシエーラは怯えたようにファスに体を預けて、肘から先だけで挙手するかのように、中途半端に手を挙げて固まっている。
死人はその全身を焚き火の明かりに写し、その色濃く落とされた陰影を強調するかのように、手を、爪を振り上げた。
俺はその動きを、喉の奥がつぶれそうなほどの緊張とともに、目を見開いて見つめている。
剣が、抜けない。

4：　対決する

抜けないのなら、抜かなければいい。
鞘に入れたまま、腰に吊るしたベルトを回して、剣を振る。
死人の顔面を殴打した。
ぶちゅ、と潰れるような手応えに寒気がする。
仰け反ったまま振り下ろされた腕が、鞘を叩いた。
ほぼ同時にファスが死人を咬み、咬み切らずに首を振って投げ飛ばす。
くるくると、壊れた人形のように手足を投げ出して、闇に消えた。

「なんなんだ、あれは！」

けっ、けっ、とファスが唾を吐くようにクシャミをする。ばっちいモンくわえちまったもんな。
ミルシエーラは怯えたように俺の袖をつかんで、首を振る。

「ダメ、ダメです、いけません。あれは、あれが、山に棲む”死”です、死人（ディエド）です」
「なんだと？」

驚いてミルシエーラを見る。
彼女はうつむいていた。だだっ子のように首を振りながら、祈るように俺の袖をきつく握る。

「あれは、不死身の肉体だけが、死してなお、生きているのです。あれを殺す術はありません。既に死んでいるものを、どうして殺せるというのですか」

くそ、と歯噛みする。
そもそもどうして、あんな化け物がここにいるのか。死した不死者とは、どういうことか。
考えなければならないことは、たくさんある。
微かな明かりに照らされて、草を踏んで立ち上がっているディエドが見える。
「逃げるぞ」
ミルシエーラを押し返して、ファスに乗るよう促す。ファスはすぐに察して体を伏せた。
ミルシエーラがするすると跨(また)がり、俺の手を掴む。
「忠志様、急いで！」
「ああ」
鐙(あぶみ)に足を掛けて、鞍(くら)に手を掛け、なんとか体を持ち上げようとする。
「早く！」
ミルシエーラが悲鳴のように叫んだ。
懸命に登ろうと足をあげる。
剣の柄が引っ掛かった。バランスを崩し、持ち上がりかけた体が落ちる。
「くっ」
「忠志様！」

鐙がぐらぐらと揺れて、まず体勢を整えなければならなかった。
ふんす、というか、はふ、というか、そんな呼気の音が鳴る。ふわりと鐙が浮いて、ファスが走り出した。

「ファス！？」

単語が理解できたほうが不思議なほどの、ミルシエーラの悲鳴を背に、ファスは駆ける。走り出したあとになって、俺の鼻も死臭を嗅ぎ取った。
しかし、次にファスの力強い後足が、地面を蹴った瞬間。
俺の指が鞍から滑る。圧し固めた革の感触が、離れた。
ほんの一瞬だけ宙の足場になっていた鐙は、するりと抜けるように、消えてなくなる。
目を見開いて間抜けに口を開けたミルシエーラの顔が、目に焼き付いた。

空気に包まれるような奇妙な浮遊感。
空を掻いた腕は、落着の受け身として、体と前後して地面に叩きつけられる。
土と草の青臭く湿った臭い。
濡れた赤土と折れた草が頬と手首を撫でる。

「くそ」

立ち上がる。右肩が痛い。
揺らめいた焚き火の明かりを背に、ディエドが走ってきていた。
見た目に似合わぬ、アスリートのような躍動的な動きだ。

剣。本当に抜けないのか。
柄に手を掛けて引っ張っても、なにかにつっかえたように動かな

い。
柄を強く捻ると、噛み合うように固まっていた鯉口が、剥がれるように動いた。引き抜ける。
「くそ面倒臭い造りにしやがって！」
鞘走りして勝手に抜けないよう工夫した職人技を呪う。時期が来るまで抜けない、的な何かですら無かったのか。
引き抜かれた剣は、やはり魔法のように、仄(ほの)かに反射して輝いている。
月明かりもない闇で、光源と言えば焚き火くらいしかないにもかかわらず。
「っのやろ！」
馬鹿のようにただ突っ込んできたディエドに、バットのフルスイングで刃を叩きつける。
重い肉の塊を殴り付けたような感触だ。手首の芯を、弦を弾くような痛みが走る。
「勇者ぁ、死ねぇぁ」
吐息に無理に言葉を混ぜたような、かすれた声。
ディエド喋れたのか、と思いながら、振り上げられた腕に気づく。
反射的に体を翻した。
身を引きながら、体をかばうように肩を向ける。
単に殴られたのだと思った。
衝撃に押し退けられ、よろめいた。じわりと染み込む鈍痛がする。
慌てて走って距離を取り、腕の肌が張り付くような感触と共に空

気が刺さるようで痛む。
掻かれた。
「……ああもう」
傷に気づいたとたん、じくじくと痛み始める。
キズだけに。
アホなことを考えたら少し落ち着いた。右腕をかばいつつ剣を構える。
ディエドは腕を振り回すようにして追撃に迫っている。
その顔面に、剣尖を突き刺した。
ずぼり、ともろくなった木を潰すように、剣が頭の半ばほどまでディエドの顔面を貫く。
ぐるり、と白く濁った瞳を回し、ディエドはもう一度俺に焦点を合わせる。
鼻頭から剣を生やしたまま動く姿に、完全に気勢を折られた。
おぞましい。
己の頭から異物を掻き出そうとするように、ディエドは剣を引っ掻く。
思わず剣を捨てて離れようと、
「忠志様っ」
ミルシエーラの叫び声が聞こえ、慌てて剣を握り直す。
ディエドを蹴り飛ばして、剣を引き抜いた。粘液がずるりと糸を引く。怖気が走る。
「おあああ」

奇声をあげて仰け反ったディエドを、ファスがたくましい前肢で踏みつけた。

「がぁ……ははぁーはぁーっ！」

かすれた声で笑う。

その顔を直視したミルシエーラは白い顔になって、こちらを振り返る。

その姿を見て、驚いた。胸のペンダントが強く輝いていたのだ。懐中電灯というか、星をルビーに閉じ込めたかのようだ。

「忠志様、急いで！」

剣を納めて、慌てて飛び付く。

今度は遠慮もくそもなく、髪を掴んで引きずる勢いで、ミルシエーラは登ろうともがく俺の体を引き上げた。

「ファス！」

ずしゃ、と押さえつけたディエドを、地面ですりつぶすようにして横に投げ出す。

踵を返してファスは体をうねらせ、魚が泳ぐように滑らかに走り出した。

「飛ばします、もっとしっかり捕まって！」

「お、おう！？」

ミルシエーラは言ったくせに少しも待たず、体を伏せて、ファスの手綱を打った。

即応して、ファスはまるで飛ぶように疾駆する。早くも振り落とされそうになり、頭が真っ白になりながら、とにかく手綱を何を強く持つ。

ガスの抜けるような音。

ミルシエーラが息を飲んだのが、背中越しに感じ取れた。

「嘘だろ……」

ディエドが、本気のファスに並走している。

腕を不気味に引き延ばし、鞭のようにしならせて、地面を駆けているのだ。

動きはウサギやチーターに似ているが、骨格が違いすぎて真似できるほうがおかしい。

またガスの抜けるような音が流れていく。ディエドが大笑いしているのだ。

「こっちだ！」

声がした。

凛々しくもやや高い声は中性的だが、男の声だ。

見れば篝火を掲げて、鹿にまたがった男が駆けてきている。赤黒く棚引く炎は、まるで旗か流星のようだ。

ディエドの姿を確認した男は、篝火を高く放り投げる。

回転し、握りにも引火したその篝火は、正確にディエドの進路を塞ぐように落下し、砕けた。

飛び散った火に巻かれるディエドは、体をかきむしるように火の粉をかき消す。

そのわずかに走りが緩んだ一瞬。

鋭く細い影が空を駆ける。

雨粒が水平に飛んだかのような。

いつの間に弓をつがえたものか、男の放った矢は、ディエドの右足を完璧に射止めた。

縫い止められた足を軸に、転倒して地面に叩きつけられ、それでも解消できなかった運動エネルギーが、矢をへし折ってディエドを吹き飛ばす。

見たことがある。そう、あれだ。

Ｆ１レースの車両事故。

軽い車体が速すぎる勢いと衝撃に煽られ、地面を弾み、軽々と空を舞う。

足があらぬ方向に曲がっているのが見えたのを最後に、ファスの駿足はディエドを置き去りにしていく。

「さあ、今のうちに巻いてしまおう」

男は笑い、鹿に声を掛けて足を早めた。

げ、と声が漏れる。

男が角を握っている鹿は、裸だ。鞍も鐙も何もない。

あんなもんに平気で座ってファスと並走するとは、普通ではない。

「どうしましょう」

ミルシエーラが少し振り返って、肩越しに尋ねてきた。

「助けてもらったんだ。それも、あのディエドを相手にだぞ。無視するのも失礼だろう」
「そう、ですね」

小さくうなずいて、ファスは男と鹿を追いかけて駆ける。
ややもすると、地平の先に火が焚かれている明かりが見えた。
近づくにつれて建物がひっそりと寄り添っている小さな村が見えてくる。だが、じきにそれは間違いだと発覚した。

「さあ、ここならなんとか落ち着いて休めるだろう」

鹿の足を止めて、男が笑う。
門扉の篝火に照らされて、息を荒くした鹿の垂らす唾液がやけに目立った。

門の中は、なにかひとつひとつ丁寧に巨大な手が押し潰したような、崩壊した家々が押し込められている。
それはいわゆる、ひとつの村、誰かの故郷のなれの果て。
廃墟だった。

「私の名前はレテル。きみたちは？」

男が、最初に口にしたのはそんな言葉だった。
まるで我が家のように村に入り、風避けになりそうな壁の残骸のそばに腰を下ろして、廃材で焚き火を起こした直後だ。
種火から徐々に火勢が強まる焚き火を挟んだ対面から、簡単に自己紹介を返す。見れば見るほど奇妙なレテルの風体を見た。

襟足に触りそうな長さの金髪をバンドで留め、整った眉や澄んだ青い瞳は優しげに細められている。
軽装の狩人というイメージを想起させる服装をしており、そのたくましい肩幅や鍛えられた体は、まるで誰かの美男像が息吹を持って動き出したかのようだ。

名前しか言わなかったが、レテルは詳しく聞き出そうとはせず、鹿に水をやりに行くと言って行ってしまった。

「忠志様」

ミルシエーラが水袋を持って、俺のとなりに膝をついた。

「腕を見せてください。治療いたします」
「ああ……すまん、頼む」

ファスから振り落とされないよう無理をしたせいか、痛みは麻痺している。ただ傷口の裏に熱した鉄の延べ棒でも入っているかのような、嫌になりそうなほどのひどい熱を帯びているだけだった。
裂けたジャケットの袖から見える傷は、幸い、出血のわりに大きくも深くもない。生地が傷に触れないよう、裂け目を開いて押さえる。
片手で器用に、生地の整っていそうな布を四つ折りにして、小瓶の少しべとつく水、おそらく消毒液、を染み込ませた。
とても手際がいい。

「失礼します」

ミルシエーラは意を決したように告げて、一気に腕に水をかける。

「――いっ、ぎ！」

声を噛み殺す。

傷口は避けたはずなのに、指で直接触れたような痛みが走り、流されたそばから空気が刺すように痛む。

素早く当て布を傷口に添えて、手早く包帯を巻き付けた。

ミルシエーラの細い指が、包帯をほどけないよう縛る。そのために引っ張られた包帯が、わずか強く傷口を押さえるだけで痛む。

処置を終えた包帯をしばらく見つめて、ようやく作業が終わったと気づいたように、ミルシエーラは肩の力を抜いて微笑んだ。

「終わりました」

「ありがとう」

いえ、とミルシエーラは治療用具を背嚢に片付けながら笑う。

「やあ。怪我はもういいのかい？」

「ああ、お陰さまで大丈夫そうだ」

そりゃよかった、と言いながら、レテルが対面に腰を下ろした。

傷は早くも痺れるような痛みを残して、あとはほとんど引いていた。

俺は早いうちにと頭を下げる。

「さっきは、助けてくれてありがとう」

「気にしないでいいよ、行きずりに手を出して、たまたま対処できただけだから」

レテルは人の良さそうな笑顔で言う。

俺は笑い返して、レテルが背負う矢筒を指差した。
「さっき射たのは、矢じゃなかったろ。なんなんだ？」
「よく見てるねえ。これはもみの枝だよ」
レテルは矢筒から一本引き抜いて、指でくるくると回す。なんの変哲もない、三十センチほどのもみの枝だ。
「もみの木……生命の象徴か」
そんなものでディエドの足を貫き、かつ転倒させるほど折れずにいた。
俺の剣はなんの効果もなかったというのに。
単純な使い方の問題……いや、やはり違うな。もみの枝に矢じりはない。
死の象徴に生命の象徴を打ち込み、対抗させる。二項対立？　物質的な手段では解決できないのか？
……いや、仮に物理的な手段で解決出来るとしても、意味がないな。使い手が俺では。
「忠志様？」
ミルシエーラに腕を引かれて我に返った。
レテルが少し困ったように笑っている。
「あ、ああ、すまない。考え込んでいた。なんの話だ？」
「いや、きみたちは、なぜディエドみたいなやつに襲われていたんだ？」
「こっちが聞きたい、と言いたいところだが、たぶん、俺が勇者だからなんだろうな」

勇者死ね、とか言われたしね。
シネだけに。
無理があるか。

「へぇ、きみが勇者なんだ。じゃあそっちの娘は神子だね。それで灯火のペンダントを使っていたのか」
「灯火の、なんだって？」
「灯火のペンダント。これです」

ミルシエーラが答え、胸のルビーをつまんで見せた。

「神子だけが、これに灯りを点せます。それ以外には、ただの安いペンダントですけれど」

言って、ミルシエーラは小さく笑った。手を離されて胸元に戻るペンダントは、日中に見たときより、少し内側が白く濁っている。

「それ、そんなに濁ってたか？」
「え？　……あれ？」

ミルシエーラが不思議そうに、不気味そうにペンダントを見つめる。
その姿を眺めつつ、思う。闇夜において、灯火を持つ意義は大きい。包含する意味としては、道標や加護か。神子が伴人である必要性が見えてきそうだ。

「なあ、改めて聞いておきたい。魔王って、何者だ？」

レテルの顔が微笑みを形作った。

「そういうのは神子に聞けばいいんじゃない？　僕が答えるようなことは知っているんじゃないかな」
「いや。ディエドに対して対処法を知っているレテルにも聞いておきたい」
「あれでディエドを倒せるわけじゃない。買い被りすぎだよ」
「足止めに過ぎなかったとしても、手も足も出なかった俺とは雲泥の差だ。だいたい、本当に何も知らず行き合っただけなら、ディエドがあんなところにいると予想できないだろうし、もみの枝なんて持ち歩いているわけがない」

やれやれ、とレテルは肩をすくめて、ミルシエーラに笑みを向けた。君からもなにか言ってやって、と目で訴えている。
ミルシエーラは静かな表情でレテルを見つめ、そっと頭を下げる。

「私からもお願いします」

レテルは意外そうな表情を作り、ふっと力の抜けた笑みを浮かべた。

「僕が知っているのは、魔王に形はなく、命を持たず、意思を持たず、理想を持たず、ただ己のあるがゆえに、世界を滅ぼす――という詩歌の一節だけだね」

形も命も意思もない？
これが本当なら、少なくとも、生物的な存在ではない。己のあるがゆえ、というのも、非常に機械的、機能側面的な存在だと感じさせる。
すなわち一般に、王と言われるような「統治者としての権力を持った何者か」ではない？

考え込む俺に苦笑して、レテルはおどけるように言葉を付け足した。

「少なくとも、切って死ぬような相手じゃないんじゃないかな？だって、形がないんだから」

「そんなはずは！」

ミルシエーラが声を上げた。

「そんなはずは、ありません。必ず、聖剣によって魔王を滅ぼすことができる、と伝えられています」

「はは。まあ、言い伝えひとつのことじゃないか。そう怒らないでくれよ。あの塔が現れて今まで、変わったことがあったわけじゃないんだ。世界が滅ぶと決まったわけじゃない。だろう？」

レテルは笑う。

それは……そうかもしれない。すべては杞憂であったと、それもあり得ない話ではない。

しかし、

ミルシエーラが勢い込んで前のめりになりながら否定する。

「それは違いますっ。それは、」

それ以上の言葉を拒否するように、レテルは手のひらを向けた。

そして、今の話をひとまず覚えようとしている俺を見る。

「きみも、勇者だか知らないけれど、命を粗末にしちゃあいけないよ。世界がどうなるにせよ、それが一番大事なんだからね」

「お聞きください！」

レテルは苦笑して立ち上がった。

「さて、僕には僕の用事もある。ちょっとした薬草を探していてね。夜明け前になるととてもよく薫るんだ。だから、そろそろ行かせてもらう」

「薬草？」

「そう。トキナ草って言ってね、万病に効くってやつさ」

覚えておくと役に立つかもね、と笑った。

その笑みに底知れないきな臭さを感じて、顔をしかめる。

なにか気軽にコンビニにでも行くような足取りで、松明ひとつを持って、レテルは鹿にまたがって闇夜に駆け出していった。

ぱちぱち、と焚き火が爆ぜる。

まったく得体の知れない男だった。

まるですべて見透かしているかのようで、レテルの言葉には考えさせられるものがあった。

「どう思う？」

「あんな人だとは思いませんでした」

ミルシエーラはへそを曲げたような顔で答える。

「世界が滅びないかもしれない、なんて。あの塔を見てそんなことが言えるなんて、あの人はなにも知らないのでしょうか」

そういうことを聞きたかったのではないのだが、いや、まあ、いいか。

「じゃあどういう人だと思ってたんだ？」

「それは」

そこでミルシエーラがハッとした顔で俺を見た。顔を赤らめて、あたふたと狼狽している。

別に変に面白がっている声は出てなかったと思ったのだが、残念だ。しかしこれはこれで、面白いものが見れたと思う。

「いえ、あのっ。た、忠志様、お怪我の具合はっ？」

「大丈夫。痛みも大分引いたぞ」

ここまで慌てなかったら、もう少し脈絡に沿った切り返しをしていれば、まだ分からなかったのにな。

確かに、レテルは男の俺から見ても色男ではあった。やや優男にすぎ、もう少し男らしいほうがモテそうな気はする。

だがまあ、体は鍛えられているし、知識も度胸もあって、助けてくれるほど頼りになる。実のところ、無理のない話だろう。

「なあ、ミルシエーラ」

「な、なんでしょう」

「また会えるといいな」

「っ、えっごほっ！　えほっ！」

なにがどこに入ったのか、ミルシエーラが本気でむせた。

生理的にも顔を赤くして、熟れたリンゴのような顔になっている。言葉にならず、必死に訴えかけるように潤んだ目を向けてくる。

思わず、声をあげて笑った。

ああ、そうだ。

そりゃあもちろん、ミルシエーラは今までも、これからも、たぶん少なくとも旅の間は、そばにいるであろう身近な存在だ。それが

知らぬ男に恋焦がれていると言うのは、なんとも居心地が悪く、疎外感に近い座りの悪さを感じさせる。
応援するとも、嫉妬するとも、やっかむともつかぬ、たいへん微妙な心持ちになる。
しかし、それでも。

正直、安心した。

ミルシエーラは、筋書きのための舞台装置ではないと。
生きて、人生を歩んできた一個の存在なのだと。
そう、確信できた気がして。
とても安心できた。

5：　挫傷する

問いたい。
他人を殺した者はすべからく罰を受けるのか。
この世に殺してもいい命などというものが存在するのか。
「きみは殺されたから気になる、というだけなら、まだ分かるけど……はは。殺そうとしたくせに気になるのかい？」
俺は訊いている。
「そうだね。結論から言おう。殺しても許される人間は存在する」

体がひどく疲れていて、暑くて仕方がないのに、どうしようもなく寒く感じられた。その気持ちの悪いダルさは関節に埋め火のように凝（こご）っている。
目を開けても、どこか寝ぼけた感覚が拭えない。頭が芯から錆び付いたように回らず、方向感覚が失われてふわりと天地が巡ったような錯覚が走る。
隣で毛布にくるまっていたミルシエーラが起き上がっている。
枕代わりにして寄り掛かっているファスが、もそりと体を震わせる。
その感覚が妙に遠いものに思える。
「……忠志様？」
「ああ」

なんとか返事は返したが、村の長老が喋るようなしわがれた声が出た。
ミルシエーラがさっと顔を青くする。
無遠慮な手つきで俺の顔、顎、喉を探る。ひやりとした感触がなぞるように肌に残る。
「熱が……どうして？」
すぐに包帯をほどこうとして手こずり、ナイフで結び目を裂いて引き剥がした。
「これは……膿がひどい、脈も。どうして、消毒はしたのに」
傷痕が空気に触れて、むず痒くなる。掻こうにも手がだるくて動かしたくない。
目を開けるのも億劫に、まぶたを下ろす。
「忠志様！　ああ、どうして、どうしてこんな、熱病なんて」
ミルシエーラは狼狽していた。その背後で、ファスが動く気配。
ミルシエーラとファスが話をしている。
……いや、そんなはずはないか。ファスは話せない。
自分に苦笑を向けたのを最後に、崖から足を踏み外したかのように、俺の意識は闇に転落した。
懐かしい夢を見た。

明瞭としているような、あるいはカップに注がれたコーヒーの表面に写り込んでいるような、もしくはクレイアニメーションで作っているかのような。
そんな風景。
夢なんてそんなものだ。

冬の日だ。
クリスマスだったと思う。当時惚れ込んでいた彼女との待ち合わせに、遅れないよう急いでいた。
駅前の繁華街で、人に見られているような気がしていた。今にして思えば、気のせいではなかっただろう。
懐に忍ばせたプレゼントに指先を触れて、にやつきながら道を急いでいた男は、さぞかし不気味だったに違いない。

彼女は、可愛い子だった。

可愛さで言えば、雑誌のモデルに起用されて、なんでこんな娘が使われてるんだと疑問に思われるレベル、というと微妙なニュアンスが理解できるだろうか。
クラスのマドンナは別の娘に譲りつつも、いや、むしろトップスリーにも入らないが、だからこそ、狙ってる男子が一番多い……そんな感じの娘だ。

そんな理沙と、どうして俺のような凡夫が交際をしているのか、というと、第一に縁が当然あるが、第二に俺がモテる理沙に苦手意識を持っていたからだ。
放っておいても人が寄る彼女にしてみれば、縁に恵まれ俺が「親しくする有象無象の男子たち」の一人に数えられているにも関わらず、妙な距離があるのが気になったのだろう。

きっかけは、それ。

今や完全に追うもの追われるものが逆転している。

待ち合わせに指定した駅前の大きなケヤキに、理沙が立っていた。

ちらりと時計を確認すると、時間のちょうど一分前。

綿密に相談した今日の予定を思い返しつつ、最後に、懐に思いを馳せて笑みをほころばせ、理沙に声をかける。

「ごめんな、待たせたか？」

「忠志」

声をかけられて初めて気がついた、とばかりに顔をあげて、理沙は俺を見上げた。

肩にかかる長さの髪が頬にかかり、理沙の瞳は泣く寸前のように潤んでいた。

一発で狼狽した。

俺がなにぞ声を発する前に、理沙は口を開く。

「ごめん、もう終わりにしよう」

顔を逸らして、理沙は言った。

「会うのも、話すのもこれっきり」

「……は？　え？　……なに？」

狼狽した頭がそっくり異次元に叩き落とされて、消滅したようだ。

言語が処理できない。

理沙はおもむろにワインレッドの携帯を取り出して、少し操作し、俺に画面を見せる。

俺の番号。
削除を実行し、電話帳のリストに画面が戻った。
「なにも聞かないで、私のことは忘れて。それじゃ」
一刻も早く立ち去りたいのか、顔を伏せたまま走る寸前のような早足で歩いていく。
追いかけて話を聞こう、と思い付いたのは、たっぷり三分もあとのことだ。
もちろん、理沙の姿はどこにもなかった。
もちろん、納得ができるはずもなかった。

腕に焼けた鉄を押し付けられているような、内側から針が肌を突き破ろうとしているかのような、激痛。
目を見開いて飛び起きて、それだけで体力を使い果たしたかのように背筋が冷える。
「忠志様！」
「ほら、早く！」
男の声。肩や腕、足を押さえつけられて動けない。
傷口をえぐるような痛みのあと、水を掛けて簡単に拭い、当て布をして包帯を巻き直す。
「忠志様。薬草を煎じたものです。どうぞ、一息に」

口に湯呑みを当てられて、ぐいと中身を押し込まれる。がつりと呑み込む音がしたほどの塊が胸を転がり落ちる。物理的に焼けるような痛みに身もだえする。
熱、これクソ熱いぞオイ！

「い、げほっ、ぅえほっ、こっ」
「忠志様っ？」
「殺す気か！？　こんなもん普通押し込まれて呑めるか！」

ひっ、とミルシエーラは泣きそうな顔で引き下がる。
ひりつくような喉の痛みをこらえ、ようやく辺りを見回す。
薄暗いそこは森の中で、崖のそばだった。川の縁、谷川の横。

「ははは、さすがに勇者は体力があるんだね。熱病にやられてこれだけ元気なら、薬湯を飲んですぐに治るだろう」

聞き覚えのある男の声。
背後から、いや、先ほどまで肩を押さえつけていた男だ。

「レテル？」
「ああ。思ったよりも早い再会だね？」

金髪の好青年は、にかりと笑った。
その笑みを見上げて、少しずつ現状を呑み込んでいく。
つまり俺は、今朝からの不調は熱病にやられたからで、ミルシエーラがその特効薬を探して、レテルに教わって治療をしたというところだろう。

「ああ、いや。嘘だな」

レテルの笑みが固まった。
「お前は俺たちがディエドと戦ったことを知っている。ディエドの腐れた体で傷つけられれば、この熱病がでることは分かってたんだろう？　だから、わざわざここで待っていた。違うか？」
「残念だけど、違うよ。言っただろう、僕はもともとこの薬草を取りにここまで来たんだ」
「そうか。……そうかもな」
変なことを言ってすまん、とレテルの顔をまっすぐ見ながら告げる。
レテルは肩をすくめるようにして、ミルシエーラに笑みを向けた。
ミルシエーラは困惑げに顔をそらし、とりあえず俺に逃げ道を見た。
「あの、忠志様。お体の加減はいかがでしょう？」
「正直、かなりだるい。まだ薬湯も効いてないんだろうな」
腰を下ろしているのに、たまに地面が傾いて振り落とされそうになる、気がする。
「ゆっくり休まれてください」
「ああ……その前に、体を拭きたい」
熱病だし、寝汗がひどかったのだろう。服がぐっしょりと重たい。
「は、はい。手伝います」
「いや、下着も代えたいから、できればレテルが手伝ってもらえると助かる」

「えっ、私っ？！」

レテルがすっとんきょうな声をあげた。

振り返ると、レテルはいつもの曖昧な笑みを取り戻している。微妙にさっきの声と結び付かない表情。

ミルシエーラと顔を見合わせて、おそらく彼女のこの表情とそっくり似たような表情を浮かべているのだろう、と思った。

ミルシエーラには向こうで、薬草の予備と荷物の整理とファスの世話をしてもらう。

タオルを湿らせながらレテルがぼやいた。

「まったく、男の裸なんて見たくないんだけどね」

「俺だって見たくもないし見せたくもない。仕方ないだろ、ミルシエーラはたぶん”おぼこ”だ」

「……きみは、なにを観察しているんだ」

「ただの推測だよ。戒律の厳しい神職にはよくあることだし、神子ってやつは、勇者とやらのために人間性を捨ててる節がある。なら、女性を捨てるのはもっとありうるだろ」

「なるほどね」

レテルはうなずく。

それに、こんな見た目だけの男にコロッとやられるのは、経験が浅い証拠だ、と内心思う。そうであってほしい。

上半身の着衣を脱ぎ、軽くはたく。

「ああくそ、寒い。レテルすまん、背中頼む」

返事がなかった。
振り返ると、レテルは俺を凝視している。
変に食い入るような眼差しは興味深そうである。
微妙に顔を赤らめているのは絶対に気のせいだと信じたい。
一発で狼狽した。
こいつ、まさか。
なんていうか、その、ほら、異性に関心が薄いタイプ、か？
外気のためでも病気のためでもない寒気が走り、ミルシエーラのための寒気も走った。

「お、おい、レテル？」
「あ、ああ。仕方ないな。まあ看病のためだからね」

レテルは無造作に、タオルを俺の胸に脇にと巡らせる。

「ばっ、おい？！　やめろいらんまじでよせ離せ？！」
「病人は無理しない」

正論だが今のお前に言われたくない。
がさりとミルシエーラが顔を覗かせた。

「忠志様？　なにか悲鳴が――きゃあああっ？！」

ミルシエーラは絶叫して、目を回してしまった。かっくんと膝から力が抜けて、頭から倒れていく。
飛び付くようにしてかばった。ついでにレテルから離れた。
おそらく、ミルシエーラは、本当に男と縁がなかったのだろう。
あるいは村人とも疎遠だったのかもしれない。
半裸の男と想い人が絡み合っている、薔薇園辺りが似合いそうな姿は、ちょっと刺激が強すぎた。

「ああ、すまん。レテル、こっちはいいから、ミルシエーラを見てやってくれ」
「そうだね、分かったよ」

レテルはなにやら安心したような顔でミルシエーラを抱え、ファスのほうに歩いていく。
一人になって、さざめく音が静寂に染みる。
投げ出されたタオルの土を払い、重たい腕を肩ごと落とす。

疲れた。
無駄に。

ファスの背に揺られて、ゆったりと道を急ぐ。
鹿にまたがったレテルは、それじゃあと手を振って、どこなりと行ってしまった。
最後に目が合ったのは、なにも意味がないと信じたい。

「お体は障りありませんか？」
「大丈夫。このくらいなら日暮れまで行けるさ」

ほとんど早足程度のファスは、ぶるりと首を揺する。

熱はすっかり下がり、体のだるさもだいぶ取れた。
だが、体力が戻ったわけではない。無理はしないよう、加減して急いでいる。
のんびりできる旅ではないし、いたずらに食料を浪費するわけにもいかないのだ。

「しかし、俺がくたばってる間に結構近づいたんだな」

ミルシエーラの肩越しに、裾野を広げる山を見る。

この山が件の峯禄山だ。

先ほど休んでいた森は山麓の端にあたる。いつの間にか峯禄山に迫っていたのだ。

ミルシエーラが手を伸ばし、ガイドする。

「長く緩やかな丘陵が続いたあと、岩が露出してくるあたりから一気に険しくなります」

指し示された辺りから、ふっつりと途切れるように草がなくなって、荒涼とした岩山に変わっていく。

「切り裂け谷は、峠から山頂近くの鋸滝(のこぎり)まで続く、長くくねった深い谷です」

ここからでも見える。

まるで山に切り込みを入れたかのように、深々と谷が続いている。

天の塔は、峯禄山を越えたさらに先、山脈に囲われた盆地にそびえ立っている。

「魔王、か」

レテルの語る詩吟が確かなら、剣技で戦う相手ではない。しかし、ミルシエーラの知る伝承には、剣で勝てるとする。

ならば、剣を物理的以外の手段として、魔王を倒す鍵とするのだろう。

剣。剣と言えば、闘争の象徴だ。戦う先として勝利の象徴でもある。
もちろん、死の象徴としての側面も持っている。
しかし、ディエドには、いや待て。
……死人（ディエド）？
ディエドは死するものであり死をもたらすものとして、間違いなく死に属するものだろう。
つまり、死の象徴だ。
その先に立つ魔王が死の象徴？
おいおいキャラ被ってるぜ。
魔王であるからには、死を併呑し支配する概念を象徴しているはずだ。
死が象徴する概念……虚無、消失、敗北、滅亡、別離、悲哀、それに再起か。どれも死より強大というほどでは、
いや、まだある。
恐怖、か。
「忠志様。そろそろ休みましょう」
「ん？　ああ、そうか？」
考えごとに夢中になって忘れていたが、俺は病み上がりだったな。
無理はしちゃいけない。
改めて辺りを見回す。草と岩山との境界に近づいた辺りだ。最後

の草地で夜を明かすつもりらしい。

「薪はまだありますが、谷のために取っておきたいですね」

テキパキと作業を始めるミルシエーラを手伝いながら、ふと問いかける。

「ミルシエーラは本当に夜営に慣れているよな。怪我の処置も手早いし」

「神子として幼い頃から訓練していましたから」

「へえ。訓練って、どんな？」

ミルシエーラの手が一瞬止まった。

「神殿の山から出てはならない、という決まりで長らく生活していました」

山籠り？

「それって……大丈夫だったのか？」

「最初はつらかったですよ。山菜を採ったつもりが毒草でお腹を壊したり、山菜でも灰汁が取れなくて苦味と臭みで食べれたものじゃなかったり、薬草のつもりで肌がかぶれたり、そう、焚き火が危うく山火事になりかけたこともありましたっけ……ふふ、ふふふ……」

ミルシエーラは無表情で笑声をあげている。

「いや、なんだ。なんていうか、相当、過酷だったんだな」

「いえ。ファスのお陰でだいぶ楽をさせてもらってますよ」

ファスは焚き火から離れた場所に伏せて、体を伸ばしている。体をほぐすように足を動かしているのを見て、ミルシエーラは微笑んだ。

「走狗は、本当は北の動物なんです。天の塔よりも向こうの」
「それが、どうしてこっちに？」
「ファスが私でも抱えられるくらいの大きさだったとき、だいたい一歳くらいでしょうか。先生、今の長老が、山のそばで見つけたって」
「神殿の？」
「いえ、この。峯禄山のです」
「こんなとこから連れ帰ったのか」
「ええ。無茶しますよね。でもファスが先生のあとをついて離れないから、って、連れ帰っちゃったんですって。すぐに私になついて、私に付きっきりになっちゃって、先生悔しがってました」

妙に情景が想像できて笑える。

「でも、名前は先生がつけたんですよ。峯禄山から取って、恵みって」
「……どう取ったって？」
「峯禄山の禄（天から恵まれるもの）の意味を借りて、古語の恵み（ファス）を当てたんです」
「なるほど」

古語とか知らないな。分からなくても無理はない。
……いや、待て。「古語」？
天の塔がバベルの塔と同じくして言葉を平らげるなら、言葉が変化し廃れる、古語化するという概念はないはずだ。
古語があり現代語があるとするなら、なぜだ？

「古語って、なんだ？」
「大昔の碑文語です」
なぜそんなことを聞くのか、という顔でミルシエーラは丁寧に説明してくれた。
「呪（まじな）いに使われていたもので、本当は発音は遺失してしまって分からないんですけど、音を当てて読んでいるんです。ああ、いえ、刻印文字に過ぎなくて音はなかったという説もあります。秘術文化の名残ですよ」
音がない、ということで疑問はいちおう解決した。しかし次の疑問が湧いて出る。
文化が廃れ、その名残、すなわち滅びた文化の象徴として、その古語が残っている。
おまけにその文化というものが、秘術ときたか。
「私のミルシエーラも古語から取っているんですよ。生命の神秘、という意味です」
呪術の言葉によって表されれば、当然、呪術的な意味を帯びる。
秘され失われた呪術のものとなれば、なおさら。
間違いなく、ミルシエーラは生命の象徴だ。
「まさか、剣に書き込む呪文も古語か？」
「え、どうでしょう。ちょっとそこまでは、分かりません」
ミルシエーラは困ったように顔を伏せた。手を伸ばして枯れ葉に

火をつける。

「さて、仕度は終わりました。夕飯にしましょう」
「え。あっ！　うわっ、しまった、すまん全然手伝わなくて！」
「いえ、私は慣れたことですから。手伝っていただくより、話をさせていただけたほうが嬉しいです」

暗に足手まといだと言われたのである。
ミルシエーラは妙に楽しそうに、固形スープを溶かし始めた。

食事を済ませ、とりとめのない思い出でも語り合っているうちに、日が暮れていつしか夜になっていた。
また、月がない。
新月と月蝕が続けて起こったのか？　それとも新月が長い？
生前月を見ることなどなかったから、運行に少し自信がない。

「もうお休みになられますか？」

夜空を見上げていたからか、ミルシエーラが声をかけてきた。

「休んだ方がいい、とは思うんだが、目が冴えてどうにもな」

今朝から寝っぱなしだったから、無理もない。
病み上がりで体力もないはずなのだから眠りたいが、頭で思ったところで体が聞いてくれるものでもない。

「どうぞ」
「お、ありがとう」

ミルシエーラが毛布を渡してくれた。

この毛布は妙に薄く、柔らかいものではないが、なぜか断熱性に優れていてまったく冷えない。自分の体温で温められて、しまいには暑くなるほどだ。
隣にしゃがみこみ、ミルシエーラはうつむいた。

「お体の加減はいかがですか？」
「すっかりよくなった。ありがとうな」
「いえ」

ミルシエーラはうつむいたまま、毛布の端を見つめている。
ゴミか何かがついている、というわけでもない。

「忠志様、お願いがあります」

小さくつぶやくように、聞こえなければそのままなかったことにするつもりだったかのような、かすかな声。
だが意を決したように顔をあげて、ミルシエーラは口をぐいっと引き結んだ。

「私を、抱いてください」

言葉を追いかけるように、ミルシエーラは体を預けてきた。

6：　離別する

「人は罪を重ねる。なぜなら、抑えきれない業をこそ、罪と呼んでいるからだ」

そんな詭弁で、罪を正当化できるものか。

「全ての罪は、すべからく許されなければならない。それは慈悲ではなく、罪の在りようによってこそ。罪が罪であるからこそ、ね」

突然、ミルシエーラが覆い被さるように身を寄せてきた。
ファスに乗るために触れ合っていたときとは違う、女性の女性ゆえの柔らかさ重さが、全身に襲いかかってくる。

その瞬間、俺はミルシエーラに恐怖した。

沸き上がるすべてを抑え込み、ミルシエーラの背に手を回す。
すがり付くようにシャツの胸を掴んだミルシエーラは、首を振る。
それ以上を求めている証を示そうとするように、顔を寄せてきた。
艶やかに潤いを帯びた長い睫毛が、まばたきに揺れる。

優しく、気立てがよく、人を立てて慎ましく、気が利いて、尽くしてくれる。
そんな人間が、そんな女がいるものか。

ミルシエーラは確かに間違いなく、レテルを好いていた。
個人として俺に迫る理由があるか。

こんなにも優しく奥ゆかしい娘に、俺がどんなに理性の虚勢を張っても消し去ることのできない、極めて人間的な感情を引きずり出されそうになっている。

「待て」

肩を掴んで止める。

ミルシエーラの吐息が首をくすぐった。

「待てません」

指が首を探る。

「待てよ」

「嫌です」

睫毛が頬を撫でる。

「待てって」

「抱いて」

「やめろ！」

ミルシエーラは、肩に額を押し付けて、小さな体を震わせた。

吐いた溜め息が、ひどく重い。

本当に、待ってくれ。

「どうして止めるんですか。……そんなに、私が嫌ですか」

「そんなわけないだろ」

「じゃあ、どうして、」

ミルシエーラは言葉を飲み込んだ。それ以上、その言葉を使う虚しさに耐えかねたのだろう。
言わされる苦しさに胸を詰まらせながら、吐き出した。
「……お前、本当は、レテルに惚れてるんだろ」
「やめてください！」
苦痛に耐えるように、掴んでいる俺の服を、きつくきつく握り締める。
「二度と、それを言わないで……。私は、私には、あなたしか、いないのに……」
うずくまるミルシエーラは小さな子どものようで、しかし、到底触れるわけにはいかなかった。
彼女の体温が、夜闇のなかに浮いている。
「そんな、誰かの決めた規律に、従うことはないだろ」
少し、勘違いをしていた。
神子は人間を捨てていると思っていたが、実際は勇者に捧げていたらしい。
要するに、ミルシエーラが「恋をするとしたら勇者しかいない」のだ。
そんな理由も理屈もない禁忌なんて、意味がないと、俺は思う。
ミルシエーラは顔をあげようとしない。
「怖いんです」

「なにが」
「……たくさんの、ことが」
まるで懺悔するように、ぽつぽつと続く言葉を絞り出していく。
「また、ディエドが来たら。今度は、みんな殺されてしまうかも、しれなくて」
昨日も、ディエドは前触れなく現れた。こんな月のない夜に、突然に。
「もし、なにか、忠志様だけが亡くなることがあれば、私は、どうすればいいのか」
ミルシエーラは顔を俺に押し付けたまま、首を振った。
「もしすべてがうまくいっても、そのあと私は、どうすればいいのでしょう」
「どうにでも、好きなことを、すればいい。神子じゃなくなるんだ。レテルのとこに行けばいいんじゃないか」
「ダメですよ。神子は命に拝する使命。一生、神子は神子のままです」
身じろぎ。
胸のペンダントを握ったようだった。赤い宝石と金細工。
「魔女に呪文を施してもらえば、あとは、魔王を倒すだけです。私の一生の意味は、そこで、終わってしまうんです」
「そんなことは」

聞く耳を持たない様子のミルシエーラに口をつむぐ。いや、言葉が続かなかっただけだろうか。
そこでやっと、ミルシエーラは首をもたげた。
「忠志様は、すべてが終われば、どうされるおつもりですか？」
「さあな」

肩の力を抜いて、空を仰ぐ。
魔王を倒せばどうなるのか、倒すべきなのかどうか。
まだ分からない。
ただ、すべてが終わったら、となると。
「少なくとも、この世界とはお別れだな」

俺はここにいるべき人間ではない。この地に根付く存在ではないから。
いや、しかし、だとすれば。
死んだ俺に、帰る場所などあるのだろうか。

シャツを強く握られ、くたりとミルシエーラの体から力が抜けていた。
「……おい？」

返事がない。
首を傾けて顔を覗き込んでみる。ミルシエーラは眠り込んでいた。
子どもの寝相のように、人の服を掴んで離さない。

苦笑が浮かぶ。
毛布をミルシエーラにも掛けて、溜め息を吐いた。人の温もりを

傍らに感じながら、目を伏せる。
きっちり手を出さない気高い誇りに、万歳。

ふんす、というか、はす、というような息づかいが聞こえた。
よく絞った濡れ雑巾で、いきなり頬を撫でられたような感触。

「でぁっ？」

半分だけ起き上がり、緑に繁る森を見張らした。
うるさそうに隣のミルシエーラがうなる。それを背に振り返れば、
毛むくじゃらに埋もれる青灰色の瞳が眼前にあった。

「ファス」

ファスは面白くなさそうに、そっぽを向いて離れていく。

「あれ……」

ろれつの回らない曖昧な声。またも振り返れば、ミルシエーラが
半分閉じたような目で俺を見上げていた。
寝ぼけたまま頭を下げる。そのまま倒れて寝入るか、という角度
でカクリと止まった。

「おはようございます」
「おはよう」

頭をゆっくりとあげる途中で首をかしげ、考え込むように瞑目し、
そこでやっとミルシエーラは目を覚ましたようだった。

半ば飛び上がるように距離を取り、体がそこにあることを確かめるように自分の服を撫で付けた。

「なにもしてねーよ」

思わず口調が粗っぽくなる。

ミルシエーラは首を縮めて、赤くした顔を隠すように伏せている。

「は、はい、すみません」

空は晴れ渡り、朝日からは惜しげもなく光が降り注いでいた。

岩山は険しく高かったが、ファスは軽々と登っていく。むしろ振り落とされないよう、しがみついていなければならなかった。

苔むした清水を滴らせる谷まで、ものの三十分もかからない。

「ここが切り裂け谷？」

「ええ。黒の魔女はこの先におられるはずです」

谷の深さは、あっという間にファスの背丈を越え、左右の崖に遮られて日の届かない暗がりになってしまう。谷川のほとりの砂利は狭く、ファスが歩いて精一杯だ。

空気は水気を帯びてヒヤリとしている。湿った岩の臭いが満ち、水が岩を叩くざらざらという音が響く。苔があちこちを覆っている。

高い崖が完全に空まで伸び、まるでトンネルでも歩いているかのようだ。

「なんだか、きれいですね」

ミルシエーラがつぶやくほど、幻想的な光景だった。

切り裂け谷という名前はピッタリのようで、かけ離れている。
しかし、だんだんそうも言ってられなくなってくる。
道はみるみる狭まり、ファスは川に入って進まなければならなくなっていた。
崖は高くなり、日の光は弱くなる。
曲がりくねる崖に遮られて、道の先を見通すことができない。
ファスは滑る岩に慎重に足を置くため、格段に歩みが遅くなっていった。ざらり、じゃらん、と水を蹴る音が続く。
跳ねた飛沫が氷のように冷たい。切るような痛みさえ伴う冷水にさらされて、ファスはもう一時間も歩いている。

「そろそろ、少し休ませたほうがいいんじゃないか」
「でも……休める場所がありません」

ミルシエーラは困惑気味に辺りを見回している。
ファスが水を避けて体を休められそうなところはない。

「せめて降りるか？　重いだろう」

今にも降りようとしたミルシエーラが、踏みとどまるように座り直し、肩を落とす。

「ファスを引いて歩くには狭すぎます。それに、私たちの足では、余計に進みを遅くするのではないでしょうか」

それはまあ、確かに。
ミルシエーラは首を伸ばして、道の先を見通そうとする。

「ですが、なんとか休ませてあげたいですね」

薄暗くてあまり遠くが見えない。
見上げれば、高層ビルほどにも高い崖がそびえ立っている。

はらり、と。
視界のすみで動くものがあった。

まるで軽く落ち葉でも降るようだったそれは、加速し、砲弾のように空気を裂いて落ちる。
声をあげる暇もない。
墜落。
水を跳ねあげ、吹き散らす。
冷えきった水滴が広範囲に撒かれ、温度がそれだけで何度か下がった気がする。

「なんだ？」

硬直するミルシエーラの肩越しに顔を出す。
暗がりにのっそりと立ち上がるそれは、どうやら人間のようだった。人型で頭があって胴があって腕があって足がある。
その顔はただれ、むくんだように膨れて、また肉がこけている。
腐れた体から鼻をつく刺激臭。
知っている。よく知っている。

「ディエド……」

ガスの抜けるような、断続的な笑声が、水流の音に交わった。

まさか、こんなところで再び会う羽目になるとは思わなかった。
いや、本当は想定してしかるべきだ。

もともとディエドは、山に棲んでいたのだから。

ファスは地鳴りのような唸り声をあげる。
崖は左右にそびえ立ち、ファスが二頭と並ぶこともできないほど狭い。
足場は悪く、まともに身動きも取れない。
逃げ場はない。

「腐れ野郎」

場所を選んで襲ってきやがった。
ディエドは嘲笑うように息を吐き、悠々と歩み寄ってくる。
舌打ちして、頭を切り替える。恨んでいても埒はあかない。
どうにかして払わなければ。生き残るために。

レテルはもみの木、生命の象徴で追い払った。
それは、生と死が、互いに排他的な「対立するもの」だからだ。

「ひっ」

ミルシエーラが怯えたように息をのみ、身じろぎした。
そうだ。生は死(ミルシエ ディエド)によって奪われるが、死を生で奪うことはできない。
もちろん、剣で死(ディエド)を払うことなど、できるはずもない。
死は終わりだ。どうすれば打ち消せる？

いつまでも考えさせてはくれなかった。
ディエドが体勢を傾けたと見えた瞬間、水を蹴り立てて飛びかかってくる。

耳鳴りがして、体に突き上げるような衝撃が走る。ファスが飛び下がったのだ。
ファスの濡れた足に引きずられて、水柱が立ち、ディエドに踏み潰された。
着地するディエドの左肩に、ファスは噛み付く。
その首を伸ばした拍子に、俺の手から手綱が外れた。合皮の感触が指に残る。
デジャブを感じて寒気が走る。
ファスは首を振り、川底にディエドを叩きつけた。弾けた水が岩に跳ねる。
慌てたあまり、ミルシエーラにしがみつく。ミルシエーラも右手で俺の腕をきつく押さえつけた。
ファスは水気を払うように首を振り回す。ディエドの体は周囲の崖に打ちのめされた。ひしゃげた右足が不自然に伸びて揺れる。
そして大きく身を捻って、背後にディエドを放り捨てた。
その動きに放り出されたのはディエドだけではなかった。片手で俺を押さえていたミルシエーラが、転がるように振り落とされる。伸ばされた左手が、空を掴んでいた。
腕につかまっていた右手が、俺を引き寄せる。
ひと一人の重みが腰にかかる。
踏ん張りも虚しく、俺の体も鞍の上を滑った。

浮遊感に恐怖を抱く間もない。
左腕を痛みが引き裂いた。
上がりかけた悲鳴が、凍るように冷たい水を呑み込む。冷水に喉が痛む。

全身が一瞬で凍ったように冷やされ、体の芯が縮み込む。

「がっ、は、げっほ、がほ」

体を起こす。肌に張り付く服が、密着してくるぶん氷よりも冷たい。

ファスの大きな尾が見えた。

急激な体温の変化にめまいを起こし、視界が暗い。そんな赤黒い世界で、ファスはぶるりと体を震わせた。

ひと蹴り。

一気にこれまで登ってきた谷を、雪崩のように駆け下りていく。

いつしか高くまで登っていたようだ。谷の入り口が遥か下にある。

ファスの白く目立つ姿は、遠く崖の岩間に消えてしまった。

ミルシエーラが腕を押さえながら体を起こし、さっと目を瞠る。

「ファス……ファス？　忠志様、ファスは！」

「分からん。一気に下って行ったんだが」

深追いする必要はなかったはずだ。それにあんな乱暴な動きで、振り落とされるなんて。

しかし、ミルシエーラは激しく動揺した。

「ああ、そんな。追いかけなきゃ。でも、ああ、忠志様、私、どうすれば。私っ」

俺の両腕を掴んで顔を落ち着かなくめぐらせる。

「落ち着け。どうしたんだ」

「ファスが、あの子が意味なく居なくなるはずがありません！　それに、私を振り落とすなんて……」

「ディエドに怯えてたんじゃないのか？」
「違います、手綱を握ってて分かります。あの子は、私たちを守らなきゃって、それで」

ああ、とミルシエーラは顔を歪ませて谷を見下ろした。
まさか。
ファスは、ディエドから逃げられないから、囮になったのか？
放り投げて、投げたディエドを追いかけてまで。

「嘘だろ……」

登ってきた道を駆け下りたファスの姿は、もう見えない。
戻ってくる気配もない。

ミルシエーラは、まるで鎖につながれた犬のように、俺の傍らから離れようとしなかった。
目だけがただ、求めるように、祈るように、崖の向こうを見つめている。

ざわざわ、と水が流れている。
今さらのように、冷たすぎる水から立ち上がった。足の感覚が覚束ない。
ファスの体では何の意味もないが、谷川の端っこはまだ少し濡れずに歩けそうな空間がある。
力なく座り込んでいるミルシエーラを見下ろす。

「追いかけなくていいのか」
「私が、本気のファスに追いつけるわけありません」

ミルシエーラは泣いていなかった。

「じゃあ、行くか」
「はい」
一分一秒でも早く。
万が一にも、ファスの稼いだ時間を無駄にしないために。
と、ミルシエーラが何かに気づいたような顔をした。
おもむろに服を脱ぎだす。マントを外し外套を脱ぎ、チョッキを脱いで、ノースリーブのシャツからほの赤く上気した肩が突然露になった。
「お、おい？」
「服で冷えると危ないですよ。特に忠志様は、まだ病み上がりなんですから」
下半身の腰巻とカーゴパンツもすすっと脱ぎ捨てる。
激しく動揺する。昨夜の彼女の言葉を思い出し、崖に頭を打ち付けたくなった。
涙が出そうだ。
「そうだな、間違っちゃいない」
顔をそらし、上着を脱ぐ。
湿った服は脱ぎづらい。苦心するように顔を伏せながら、ひどく自分を呪った。
この状況で、ファスのことを一瞬忘れかけた自分に、吐き気がする。
さっさと脱ぎ捨てて下着姿になる。
標高が高く気温も低い。脱いでもあまり変わらないような気がし

た。

「貸してください」

服を絞り終えると、ミルシエーラが手を差し出してきた。

そのすらりとした白い腕が、どこにつながっているのかを意識しないようにする。

「ん、いいよ。重いだろ」

「いえ。すぐに乾かします」

え、と驚いている間に、ミルシエーラがさっさと服を取り上げてしまった。

彼女の肌着の胸にあるペンダントが、淡く輝く。

「光量と熱量はある程度調整できるんです」

少し笑ったように言って、ペンダントを手に握って服を撫でる。

そこから蒸気が吹き上がった。

こう、あれだ。

アイロン掛け。

「終わりました」

ものの数十秒で、服を一通り乾かしてしまった。

「それ、熱くないのか？」

「私は全く。でも、神子以外の人が触れると火傷してしまったり、最悪、燃えてしまいますね」

「燃えて、って……」

「思いっきり熱くした場合だけですよ。温度が高すぎて発火してしまうんです」
「へえ」
そんな凶器を首からぶら下げて持ち歩いてたのか。
「とにかく、助かるよ」
「いえ。これが神子の役目ですから」
袖を通す。本当にカラッと乾いていた。凄い。
ミルシエーラも自分の服を乾かし、すぐにすすっと着なおしてしまう。
うん、その厚手のマントは、俺の精神衛生にとても役立つな。
「お待たせしました。行きましょう」
「ああ」

保温は体力温存のために必須、とはいえ、この状況で足を止めたのは痛い。
道を急ぐ。

はずが、ややもしないうちにその足を止めることになった。
轟音。
銅鑼を叩いた音を、永久に引き伸ばしたような。
霧がかった空気を裂くように、その滝はあった。
長く、段々と無数の小さな滝を繰り返しているが、流れは別れず一本に白い線をたどる。
切り裂け谷の終わりであり、何万年と時を重ねて谷を築いた流れのもと。
鋸滝（のこぎり）。

この先に、いるはずだ。
黒の魔女。

7：　遡逆する

運命ってものは、あるのか？

「事実に意味をつけるのは、いつだって、人間だ」

質問の答えは。

「運命が、あっても、なくても、きみの現実は変わらない。事実っていうのは、そういうものだよ」

鋸滝の脇をたどるようによじ登る。蛇行するように行けば、なんとかキツイ階段のように歩いていける。

鋸滝は一帯の水源で、岩の裂け目から噴き出しているのが見えた。

「本当に、黒の魔女はこんなところに住んでいるのでしょうか」

「どうやらそのようだぞ」

滝を上りきった先を指差す。

磐座のようになっている奥に、小屋がひっそりと建っていた。

煙突から煙が上がっている。

ミルシエーラと顔を見合わせる。

行こう。

扉を叩く。

乾いた軽い木材は、密度が薄そうで軽い割には、繊維がしっかり

していて硬そうだ。

「入りなさい。穂村忠志」

女の声。

「……失礼します」

木戸を開ける。

地面はよく掃き清められた土だ。家具がなくがらんとした、桶と水瓶と竈だけの家。

その木と土のなかにひとつだけ。不釣り合いに精巧な揺り椅子に、肘を突いて黒服の女が腰掛けていた。

「待っていたわ」

極めて簡素な作りの黒いワンピースを着た、若い女が、にっこりと微笑んだ。

歳はミルシエーラと同じくらい。顔つきは日本人だ。目が大きく、小ぶりな鼻やすらりとした顎など、その容貌は不気味なほど整っている。

ふと、変な既視感に見舞われた。

「あなたが黒の魔女、ですか？」

「そうよ。あと、敬語は要らないわ」

空寒いほど愛嬌のある微笑みを浮かべ、彼女は軽く手を振る。

「ここまで来たからには、私に頼みがあるのでしょう？」

「あ、ああ。この剣に、呪文を刻んでほしい」

「容易いこと」

魔女はさらりと言って、笑みを深めた。

「けれど、それでは足りないわ。呪文だけでは、意味がない。あなたが剣の使い方を知らなければ、魔王を倒すことはできない。決して」

「……それは、どうすれば？」

「あなたはそれを知るだけの材料を、すでに持っている。ヒントをあげましょう」

言って、魔女は立ち上がる。

ミルシエーラよりも小さい。

彼女は俺の前に立って、微笑んだ。

「すべては、今、このあなたでなければ、ありえない」

そうして、彼女は柄に手をかけて勝手に剣を引き抜いた。

剣を蕩然と眺めた魔女は、ひらりと背を向けると、木の蓋を開けて梯子に足をかけた。

そこで振り返る。

「今夜は泊まっていきなさい。呪文を刻むのに一夜かかる。食べ物はあるものを好きに使っていいわ」

言い残して、地下室に降りていった。と思うと腕が伸びて木蓋を掴み、閉じようとして少し開けて、

「地下室には入らないこと。危ないからね、勝手に死んでも知らないわよ」

言い残して、木蓋を閉めた。
遠い滝の音が、時間をさかのぼって聞こえてくる。
「取り残されちまった、な」
「そう、ですね」
ミルシエーラが沈んだ面持ちでつぶやいた。
ファスのことをまだ気にかけているのだろうか。
「外にいてもいいぞ」
「いえ。そういうわけには参りません」
苦笑を見せて、ミルシエーラは首を振った。
「それよりも、先ほどの話です、忠志様。……呪文を刻んだだけでは魔王を倒せない、なんて」
「ああ。剣の使い方って言ってたな。なにか、知らないか？」
「いえ……伝承には、なにも。申し訳ありません」
「いや、いいんだ」
今の俺が知っていることだけで、剣の使い方を導き出せる、と魔女は言った。
ここでの魔女は、鍵を完成させてくれる賢者の役割を負っているのだ。信頼してもいいだろう。
おそらく魔術的だったり技術的だったりする用法ではない。俺はその手のことをなにも知らないからだ。
しかし、かといって、そのいずれでもない方法なんて、なにも分

からないぞ。

ミルシエーラは考え込む俺から目を逸らし、窓を見つめていた。魔女は呪文を刻むと言ったが、具体的にどうするのか、なにも聞いていない。木蓋は見た目以上に厚いのか、それとも地下が深いのか、物音ひとつ聞こえない。

家は本当にものがなく、棚など収納家具が一切ない。ベッドに類するものは地下室にあるのだろうか。

ただ木箱はいくつかあり、そのなかに根菜や果物などは収められていた。

竈には薪（まき）を使っているが、薪（たきぎ）の量がさほどない。裏手当たりに倉庫でもあるのかもしれない。

飾り気のない屋内に、唯一窓辺に、鉢植えで若木が飾られていた。

ため息をつく。

「難しいな」

思考が泥沼にはまったように鈍っていた。集中力がもたない。

窓辺に立っていたミルシエーラが歩み寄ってくる。

「思い付きませんか？」

「ああ。どうにもな」

「忠志様の勇者になられる以前の記憶には、ございませんか？」

「ないな。剣なんて本物を見たこともない」

本当は魔剣だとかの概念も知っているが、使い方を知るとなるとそれはノーだ。そんなもん知るわけがない。

ミルシエーラも一緒になって考え込んでくれる。

「この今の、忠志様、ですか」

黒の魔女が残した意味深な助言を繰り返すが、そんな文章に実際自分の名前が入ると気恥ずかしい。

待てよ。

「……俺？」

この今の俺、人生を歩んで、それなりに知識をつけた穂村忠志という人間でしか、ありえない？

つまり、全ての状況において、それが俺であることに必然性がある、ってことか？

「いや、違うな。必然性なんて言葉は後付けだ」

順序は逆で、俺だからこの状況になった。正確には、俺こそがこの状況に向かって進んできた。

「あっ」

思わず立ち上がる。

ぶつぶつと独り言を漏らす俺を、不気味そうに見ていたミルシエーラが、驚いた拍子に木箱にふくらはぎをぶつけて、しゃがみこんだ。

「俺が勇者をやっている、ってことに、意味があるのか？」

どこの誰でもいい勇者が魔王を倒す、という構図ではない。

俺が勇者として魔王を倒す、ということか？

「待てよ、待てよ」

揺り椅子に腰を下ろし、目を伏せて集中する。

俺は、穂村忠志で、元の世界で死んだからこの世界に来た。

ホムラタダシの名は、ホムラとは炎のことだ。炎は破壊と発展の象徴であり、善悪両義的なものである。しかし、タダシの名でその善的な概念を抽出している。そしてホムラは、炎は、神話においても神を殺しうる現象だ。

その穂村が姓にある。姓とは家を、つまり血を意味する。忠志、志に忠するという信念が、個性としての名にある。

意味としては通る。まるで英雄だ。我ながら恥ずかしい。

そして、それとは別に、考えるべきものがある。

つまり、俺は既に「死んでいる」ということだ。

死者というのは悪的なものだが、英霊というように、純粋に負の面だけを持っているわけではない。

そう、ディエドのときにも考えたが、死という概念には「再起」の意味が含まれている。

死を経るという強力な経験は、神話においてもよく見られる。英雄が死を経験していることは多い。

通常ありえないはずの「死からの復活」は、その者の聖性を高めるのだ。

なんてことだ。俺はまるで英雄じゃないか。

ものすごい馬鹿のような字面に失笑する。

どうやら俺が勇者とやらに祭り上げられたのは、偶然ではないらしい。

ああ、だが、しかし、ダメだ。

「剣の話につながらない」

まだだ。まだピースが足りない。

そこでぱったりと道が途絶えてしまったかのように、思考の回転が終わってしまった。

少し苛々する。脳を急かすように額に手を当てても、手のひらの闇が閉じたまぶたに映るだけで、何か思いつくわけでもない。

見かねたミルシエーラが、肘掛に手を置いて隣に膝を突いた。

「忠志様。もしかしたら、今忘れてしまっていることが、鍵なのかもしれません。最初から、たどってみましょう」

「最初から……。そうだな」

疑問に思っても、聞く機会を逸したうちに忘れたこともあるかもしれない。

「最初に確認するが、天の塔は突然現れたんだよな？」

「はい。そして、呼応するように忠志様が現れられました」

どう考えても対（つい）の関係だよなあ。

いや、待てよ。対といっても、対立する存在ではなくて、類似する存在という解釈もあるか。

「それから、ミルシエーラが現れて」

「はい。快く請けてくださいました」

ミルシエーラはその翡翠色の瞳をくすぐったそうに細めて、はにかんだ。

対の関係といえば、勇者と神子も、常に同行する存在だ。なにか

対応関係にあると言えるかもしれない。
……対応関係、と、いえば。
生命の神秘が神子で、故人が勇者。
神子は、ミルシエーラは、失った俺の命を暗示している？

「すぐに聖剣の祠にお連れしましたね」

ミルシエーラが懐かしむように言う。

「忠志様がなにともなく聖剣を携えて戻られたときは、本当に、感動致しました」
「そんな大したものには思えなかったけどな」

今でもあまり思っていない。今までの旅でまともに役立ったことがない。
それでも、勇者の証として、そして魔王を倒す鍵として、欠かすことの出来ないものであるのだろう。

「それから、私は……」

ミルシエーラは言葉を止めて、唇をかみ締めた。
ああ、そうだ。
その後は、ファスに乗って村まで連れて行ってもらったのだ。
ここが俺の知る世界ではないことを痛感させられた。ファスは、走狗はまさに、俺の中での異界性の象徴だ。
その後は、長老に初めて伝承を聞かされた。結局、あのとき以上の情報が伝承から聞けたことはなかったが。
出立して峯禄山の話を聞いたりしながら、晩になってディエドと遭遇した。
手も足も出ず逃げ出して、あの時初めてミルシエーラの灯火のペ

ンダントとやらを見たんだったな。
あれは神子にしか扱えない、ということは剣と同じで神子の証と言えるだろう。

「……ん？」

何ともなしにミルシエーラのペンダントを見て、思わず声を上げてしまった。

「どうしました？」
「それ、また白く濁ってるぞ」

ペンダントが内側に白いもやがかかったかのように濁っている。以前よりもひどくなっていて、ルビーとしての輝きがすでに失われかけていた。
ミルシエーラが慌てた手つきでペンダントを手のひらに乗せる。
よく見るとそれは濁っているのではなく、微細なひびが内側に広がっているようだ。

「そ、そんな。どうして」
「これって、使うと壊れていくんじゃないか？」

ミルシエーラがハッと顔を上げる。切羽詰ったような表情で、白い顔をさらに蒼白にして前のめりに叫んだ。

「そんなはずがありません！　だって、これは神子にしか扱えない、勇者様を補佐するための大切な……！」

急に力を失ったように口をつぐみ、手のひらのペンダントに視線を落とす。

「勇者様を助けるためにしか使ってはならない。そう、固く、言われてきました。もしかして、そもそも使うことの出来る機会が、限られているからなのですか……？」
「分からない。念のため、もっと慎重に使うか決めたほうがいいかもな」

ミルシエーラは無言でペンダントを見つめていた。
「忠志様、私は、本当に、何のためにいるのでしょう」

ペンダントを握り締め、胸に掻き抱いて、ミルシエーラは顔を伏せる。

「ずっと勉強してきた伝承は役に立たず、レテル様にも助けられてばかりで、魔女様のように知恵も力もなく、ファスを踏み台にせねば何も出来ない。頼みのペンダントは、私の存在意義は、こんな簡単に壊れてしまうものですか」

肩を震わせるミルシエーラは、雪が解けて消え始めるような、そんな儚さで小さく見えた。

「そんなわけないだろ。ミルシエーラは偉いぞ、ずっと。俺は、俺なんて、もっとひどい。剣ぶら下げて運ぶことしかしてないのに、レテルやミルシエーラたちに散々迷惑かけている」

ああ、全く、本当に。朝から晩まで助けられ通しだ。
せめてと巡らせる思考は、本当に役に立つのかどうか。
ミルシエーラは俺の後ろ向きな笑いを否定してくれた。

「そんなことありません。だって、忠志様は勇者でいらっしゃいますから」
「実際、俺が何かしたか？」
「もちろんです。たとえば、あの……お、お待ちを……」
生真面目なミルシエーラが、額に指を当てて必死に考え始めてしまった。
いや、いいからそんな無理矢理フォローしなくても。むしろここまで絞り出せないところを、むざむざ見せつけられると、逆にへこむから。
「ま、魔王に対抗できるのは、忠志様だけなのです。他の誰にもできないことをしなさるのは、とてもすごいことではないですか！」
「ありがとうな。ま、今のままじゃ絶対に魔王は倒せないらしいが」
はは、と乾いた笑いが出てきた。
「あの、その、そうだ！　晩御飯にしましょう！　もう空も暗くなってきましたし！」
「はは、そうだな」
誤魔化しが露骨すぎる。
「あの、それでは、お手伝いいただけますか？」
「もちろん。最善を尽くすよ」
下手な冗談にミルシエーラが失笑した。
置いてある食材は保存がききそうな根菜が中心で、ミルシエーラの発案で煮物にするらしい。
皮剥きだざく切りだと手伝ったが、俺がひとつ片付ける間にミル

シエーラはみっつ終わらせてしまう。
ふふ、あんた、いい嫁になれるぜ……。
鍋に一通り入れてしまうと特にすることもない。主食がないと困るということでパンを発掘したミルシエーラは、さらに手早くきんぴらも作った。
俺はその横で、薪を定期的に放り込んで火力の調整をするだけ。
ミルシエーラは横から竈と薪を覗き込み、顎に指を当てた。
「んー。薪が足りないかもしれませんね。すみません、忠志様。たぶん裏に予備の薪があると思うので、取りに行ってもらえませんか？」
「分かった」
最後に薪を突っ込んで立ち上がる。
ミルシエーラが一人で薪と鍋の面倒を見ているのを背に、小屋を出る。
夜は暗い。
窓から漏れる屋内の灯りを頼りに、裏に薪割り場を見つけた。そこから積まれた薪を取る。
丸太のまま乾燥させているものも大量に積まれていた。あとで薪割りを手伝っておこうか。
「ん？」
そこに変に丸めて投げ込まれた布を見つけた。窓から捨てたような感じだ。
タオルかなにかだろう、と深く考えずにつまみ上げる。
なぜわざわざつまみ上げたかって、たまたま目に入って興味を引かれて、なおかつどこか見覚えのある刺繍があったからだ。

端的に言えば服だった。
それも男物の。
もっと言えばレテルの。

「わあお」

思わず呟いてしまった。
これはいったい、どういうことだろう。まさかレテルは、黒の魔女と関係があるのだろうか。
いや、関係があるって、もしかして、なにせ服が無造作に脱ぎ捨てられているのだし、そういう意味で、関係がある、という可能性もあるわけなのだが。
いやこれ、そうだとしたら、ミルシエーラさん……。

「どうしました？」
「なんでもございませんよ？！」

突然そのミルシエーラに声をかけられて、声が裏返った。
窓から顔を出した彼女は訝しげに俺を見ている。脇に抱えた薪と、そしてもう片方の手に掴み、検分するためにうまいこと広げられた、件（くだん）の布を見た。
ハッとして背中に隠す。
ミルシエーラは目を丸くして、

「それ、レテル様の」

言いかけて口をつぐんだ。
足元に転がる、レテルの他の召し物を発見していた。

「忠志様」

「は、はい」
「それも、持ってきてくださいますか？」
めちゃめちゃ静かで落ち着いた声だった。
わかりました、とうなずくしかなかった。

8：　勘考する

「小さな雫が寄り集まってできる大きな流れは、まるでそれが必然であったかのように、爪痕を残す。何も不思議なことはないよ」

薪の割れる音と、鍋の煮詰められるくつくつという音。
ミルシエーラは無言で、急逝した夫の遺品を前に茫然とする未亡人のような目で、並べたレテルの衣服を見つめていた。
無駄に肩身が狭い。
重苦しい沈黙に包まれる室内で、窓辺に飾られた若木の鉢植えも気まずげに枝を揺らしている。あれはもしや、今さらだが、もみの苗木じゃなかろうか。

「お腹空いたー。あんたたちご飯作った？」

ばかし、と扉を跳ねあげて、黒の魔女が朗らかに登場した。
……え？

「いやお前、一晩出てこないんじゃなかったのか？」
「は？　いやそんなわけないでしょう。飯抜き休みなしで仕事しろって、どんな鬼畜生よあんた。こう見えて私あんたよりずっと歳上よ？」
「それは何となく分かる」
「なんですって？」

なんで怒るんだよ、自分で言っておいて。
魔女は竈で煮られている鍋に気づいて、にっこり笑った。

「さすが神子、私のぶんも作ってくれてるわね」

言って、振り返った黒の魔女は、顔色をなくした。百面相か。

猫じゃらしに飛び付くような勢いでレテルの服を回収し、黒の魔女は超なんでもない素振りで、そっぽを向いて口笛を吹きながら木箱の裏に服を蹴り込んだ。

「……魔女様」

「あ、あぁらミルシエーラ。なにかしら？」

不自然ってレベルじゃない。

「これは、どういうことですか？」

「な、なんのことだか解らないわ」

「レテル様のことです」

「さ、さぁ、誰だったかしら」

すっとぼける黒の魔女の肩を掴んで、ミルシエーラは小首を傾げた。

「説明、いただけますね？」

黒の魔女は、うぅっと唸ると、勢いよく両手を打ち合わせた。

「わ、悪かったと思ってるわよ！　私だってね、勇者を一目見ておかないと分からないじゃない！　でもいいでしょう、ディエドからも助けたし、詩だって教えてあげたのだから！」

開き直るように捲し立てるその言葉に、俺とミルシエーラはさぞかし間の抜けた表情を浮かべたものと思われる。

一目見た？
ディエドから助けた？
詩を教えた？
俺は振り返って窓辺の若木を見る。レテルの放った矢と同じ、もみの木である。
「ちょ、ちょっとお待ちいただけますか。今なんと仰いましたか？」
「え？」
黒の魔女はミルシエーラを見上げ、次いで俺の顔を見上げた。
「まさか、トチった？」
半笑いを浮かべている黒の魔女に、静かに確認する。
「お前がレテル本人だったのか」
「……ええ。そう。男に化けたら、いくらなんでも気づかれないだろうと思って。まさか物的証拠を捕まれるとは夢にも……と、早とちりして、絶望してゲロったわけ」
やれやれ、と魔女は威厳も何もない軽さで肩をすくめた。
しかし、考えてみれば思い当たることもないではない。
そもそもディエドに対して対抗手段を持っていたことや、伝承に漏れていたような詩吟を知っていたこと、そして都合のいい薬草を探していたこと。
裏があるだろうとは思っていた。
が、まさか、ここまでのものとは思わなかった。
そこでふと思い出す。レテルの様子が明らかにおかしかった、熱病で体を拭いてもらおうとしたとき。あれも当然、中身は魔女だったわけだ。

「あ、てことはお前、人の半裸を」
魔女はギッと勢いよく俺をにらんだ。
「見たくて見たんじゃないっ！」
「そのわりにガン見してただろ」
「ががガン見なんかしてないわよっ！？　そりゃまあ、男の体なんて何十年ぶりだったからちょっと意識しちゃったけど？　でもちょっと！　ちょっとだけだしっ！」

様子がおかしかったとは思ったが、逆にここまで過剰反応されても困る。
男だと思って気兼ねなく半裸を見せて、同性愛嗜好だと思って動揺して変に焦って、さらに実は中身は美少女で、挙句の果てには外見に似合わない年齢を重ねていた、という事実に、いったい俺はどうリアクションすればいいのか。
しかし、俺のことなど些事でしかない。ミルシエーラの様子をうかがう。

ミルシエーラは、淡い微笑みを浮かべて、力なくまぶたを伏せていた。
そのまま、見事に立っていた紙が風に煽られて倒れるように、力なく体を傾けていく。
「ミルシエーラ！　気を確かに！」
「え、わっ。なんでその子気絶してるのよ！」
「お前のせいだ馬鹿！」
「ば、馬鹿！　言うに事欠いて馬鹿ですって！？　魔女に！？」
「いいからタオルと水持ってきてくれ！」

「ああもう、分かったわよ！」
鍋がばすっと小さく吹き零れた。

敷いた布団に寝かせていたミルシエーラが目を覚まして、気を落ち着けさせたあとにようやく夕食の仕度を始めた。
「味薄（うっす）ぅ。ちょっとダシの味しかないじゃない。塩、塩」
「魔女のくせに濃い味が好きとか、どこまで俗化されてんだ。ほれ、ミルシエーラ、熱いぞ」
「あの、自分で食べれますから」
「まあ待て。無理はするな。お前の受けた衝撃はなんていうかコメントに困るレベルだ。出来る限り介助させてくれ」
「いえ、ですから。せめて冷ま」
「遠慮するない。日ごろのお礼だ」
「むぐ、あふ！　あっふ！　おふ！　おごっふ！」

むせてしまったミルシエーラに水を手渡す。
我関せずとばかりに、魔女はスープ片手に固めてない柔らかいパンをかじっている。俺の腰をつま先で蹴った。

「どうなの、あんた。魔王は倒せる？」
「蹴るな。そんで全く分からない。なあ、もう少しヒントくれないか」
「それじゃあ何の意味もないわ。答えを持つことは結果論で、答えを出すことが重要なの」
「そんなこと言われてもな……」
「仕方ないわね。今どこまで気がついているの？　洗いざらい吐き

なさい、すべて」
「すべて？」
「そう。すべて。まだ話してないこともね」
さすがは魔女というべきか、心まで読めているのではないかと思うほど、言い当ててきた。
人心地ついたミルシエーラが、訝しげに俺を見る。
確かに、まだ誰にも、一言も、俺がこの旅をどう捉えているか、ミルシエーラにすら話していない。
「あんたの口から語り直すの。そうすれば、見えてくる……かも」
つくづく頼りにならないが、すべてを見透かすような物言いをしたレテルの中身であり、伝承にさえ残される黒の魔女だ。
答えにたどり着く光明が見えるかもしれない。
「まず、大前提から話す。俺は、そもそもここに現れたのは、生前への未練に対する、救いと罰だと聞かされている」
「聞かされ……って、誰にですか？」
「質問しない、神子」
魔女に諌められ、すみません、とミルシエーラは恐縮しきったように肩を縮める。
「誰だったかは、知らん。もしかしたら、神様か何かかもな」
正直信じていない。
「ミルシエーラのことは、俺は……そうだな。この世界の象徴であり、勇者の半身であり、俺の……すでに死んだ身である俺が失った

魂の象徴じゃないかと思っている」

浮かんだ言葉で説明していて、すでに死んだ身、という自分の発言に引っかかりを覚える。

それはまるで、死人（ディエド）のようだ。

死からの復活というモチーフは聖性を高めるが、同時に、禍々しく世界を外れた忌むべきものにもなりうる。

「黙らない。それを口にする」

「あ、ああ。俺とディエドは似ているなって。同じ、すでに死んだ存在だ。俺は勇者って聖性をつけてるが、あいつは禁忌の存在に落ちぶれている。待てよ」

なにを根拠に聖性を高めていると言った？

俺が勇者だから、って？　そんな証拠もあやふやで中途半端な剣一本の立場で？

「似ているどころじゃない。俺とディエドは同一だ。……ディエドが、俺の姿なのか？」

「止めるな。続けなさい」

自分の手を見つめそうになった瞬間、魔女に急かされた。

ミルシエーラが信じられないという顔で眉をひそめて俺を見ている。

「違うな。たぶん違う。俺とディエドで違うのは、そう、ミルシエーラだ。俺のそばにはミルシエーラがいる。ミルシエーラは生命の象徴だ。いつか言っていたな、ディエドは魂が死に、不死身の体のみが死してなおさまよっていると」

「え、ええ。申し上げました」

戸惑ったまま答えるミルシエーラに、黒の魔女は満足げな笑みを向けた。その仕草の端にどこかレテルの面影が見える。ミルシエーラもそう思ったのか、顔を伏せてしまった。
可哀想に思うが、今は、それどころではない。せっかく頭が回ってきているんだ。止めるわけにはいかない。

「だから俺はミルシエーラと居るから勇者なんだろう。失われたはずの人間性をミルシエーラが補ってくれてるんだろう。いや、どうかな。そこまで機能主義に考えるには、ミルシエーラは人間味に溢れてる。こう言うとおかしいな。ミルシエーラはミルシエーラで、俺は俺だ。それでも、俺たちは勇者と神子だ。たぶん、そういうことだ」
「そうね」

魔女が楽しそうに相槌を打つ。
自分の言葉が破綻しているような気がしてきていたが、肯定されてしまって思考が流れる。

「俺はだから、最初はこの世界を普通に物語だと思っていた。誰かの用意した書割と役者の立つ舞台に、突然放り込まれたようなものだと。でもたぶん、違うんだろう。両義的だ。重ね合わせと言ってもいい。その側面はゼロじゃない。でも全てじゃないし、まして真実ではありえない」
「魔王はどう思う？」
「魔王はつまり、最終目標だ。世界が指向する先で、物語の結末だ。英雄譚における最終目標というのは、だいたいが社会における障害の象徴であるほかに、英雄の通過儀礼としての障害という意味がある。だからたぶん、俺は、その魔王という象徴を乗り越えれば――何かを得られる」

「なら、だからこそ、魔王はなんの象徴だと思う？」
「恐怖……だと思う。最初は死じゃないかと思ったけど、死はディエドのものだから。それに死は乗り越えるものじゃないし、乗り越えてしまえば、それは摂理に反することだ。俺が死人（ディエド）になるだけだ。死は受け入れるもの。そして次に繋ぐものだ」
「ふふっ」
「魔王は、世界を滅ぼすのですから、終わりの象徴、ではないのですか？」

魔女が嬉しそうに笑い、ミルシエーラがおずおずと聞いてきた。
俺は首を振る。

「魔王は終わりの象徴って考えてもいいが、英雄譚で敵を倒して終わり、というものはまずない。そこにエピローグが挟まらなければ、観客は落ち着かないだろう。魔王は終わりじゃない。倒しても倒せなくても、終わるわけじゃない。そう、例えるなら、あれだ。変革。すべてをひっくり返してしまう。でも、だからって変革を象徴しているわけじゃない。魔王が変革を望むわけじゃない。滅ぼそうとしているのだから。だから変革は結果論で、観測者的な立場による、感想だ。だからたぶん……恐怖、を象徴しているはずだ」

違うかもしれない。いや、たぶん違うだろう。
しかし、では、なんだ。

「そこまで分かっているなら、もう何も言うことはないわね」
「は？」

魔女が楽しそうに笑ってパンの欠片を口に放り込んでいた。
しっかり咀嚼して飲み込んだ魔女は、器を放り置いて地下への木蓋を開ける。

「お、おい待てよ。まだ分からないぞ！」
「そこまで分かっていて閃けないんじゃあ、その器じゃなかったってことよ」
「お前はこの器を片付けろ！　そんでもってちゃんと教えろ！」
「甘えないの。家賃と思いなさい」

かみ合ってるんだかかみ合ってないんだか分からない会話を残して、魔女は梯子を降りていく。戻ってきて手を伸ばし、木蓋に手をかけた。

「本当に最後に、特別に教えてあげましょう。剣に刻む呪文は、知恵の意味を持つ古語の、最上級敬語。エルノレムファシェル。音に意味はないけどね」

じゃ、と声を残して木蓋をばたしと閉じてしまった。
結局何を言うこともできなかった。
剣に知恵を刻む。いや、知恵を武器にする？

「あの、忠志様」
「ん、ああ。ミルシエーラ。悪い、今器を」
「いえ。もう自分で食べましたから」
「そうか」

お節介だったと声を大にして言われたようでへこむ。いや、まあたぶんそうだったろうと思うが。
しかし俺のなんというかコメントできないレベルの同情心を、どう表現したらいいものか。
俺がやきもきしていると、ミルシエーラは俺をじっと見つめていた。奥歯にものが挟まったような感じで、そわそわと落ち着かない。

「あの、忠志様は」
「おう。なんだ？」

頼みごとか、なんでもこい。
しかしミルシエーラは、もにょもにょと口を動かして、結局言葉を発することなく誤魔化すような笑みを浮かべた。

「いえ。やっぱり、なんでもありません。それより片付けてしまいましょうか」
「ああ。あ、いや、俺だけ話しまくってて食ってないな」
「では、お待ちします。……あ、そうでした。忘れる前に、申し訳ありませんが、少々こちらに来ていただけますか？」
「ん？　どうした」

布団に腰を下ろし足を伸ばしている状態のミルシエーラの隣に立つ。
ミルシエーラは腕を伸ばし、俺の腹を、ぎょりっとつねった。

「ごぎゃあ」
「よくも熱々のイモを人の口に押し込んでくれましたね」

言葉もなく撃沈。なんだ、なんていうか、なんだこの痛み。
稲妻が貫いたような、肉を引きちぎって戻して貼り合わせたような、なんか尋常じゃない痛みが暴れている。
どんだけ全力で仕返ししてくるんだ。

「ミルシエーラ、お前」
「なんでしょうか、忠志様」
「結構、根に持つタイプなのか」

ミルシエーラは小さく笑って、楽しそうに言った。

「そうかもしれません」

9：　出立する

「忠志様、朝です。起きてください」

肩を揺すられ、目が覚めた瞬間に、肩の裏と背中が針金でも通したかのようにガチリと張った。

痛みで眠気が引っ込む。同時に昨日、寝ずに魔王を倒す方法を考えていたことを思い出す。まぶたが重くて、少し休むつもりが、床の上で寝こけていたらしい。案外床でも眠れるものだ。お陰で体が凝った。

目を開けると、ミルシエーラの翡翠色の瞳が見える。

「おはよう、ミルシエーラ」

「はい、おはようございます」

くすりと笑って、ミルシエーラの顔が引っ込んだ。

起き上がると、殺風景な魔女の家が見渡せる。木箱に腰掛けて、魔女がドライフルーツをかじっていた。

その傍らには、剣が鞘に入って立て掛けられている。

「起きた？」

「……まあな」

重く沈んだ声が出る。結局、なにも、答えなんて見つからなかった。寝たとか、どうすんだ。

「そう悲嘆することはないわ。あなたは充分なだけ分かっている。あとは、気がつくだけ」

「それがうまくいかないから困ってるんだ」

「言ったでしょう、悲嘆することはないと」

魔女はにこりと微笑んだ。

立て掛けていた剣を俺に差し出す。

「これ以上の滞在は許さない。魔王もノンキに待ちはしない。さあ、天の塔に向かいなさい。時機を前に気がつけば、あなたの勝ちよ」

絶句した。

「ま、待てよ。分からなかったら魔王を倒せないんだろ？」

「ええ。そのときは、その結末を迎えるだけ。勘違いしないでね。あなたがここで愚図っていても、話は同じだから」

「そんな」

ミルシエーラが怯えたように言った。ついに常々恐れていた破滅が訪れると言うのだ。怯えて当然だ。

「でも、今から行けば間に合うんだよな？」

「ええ。間違いなく」

「じゃあ」

息が切れた。

どうも動揺しているらしい。苦笑を笑みに変える。

「やるしかないってことじゃないか」

「結構」

黒の魔女は笑った。

「鞘を換えておいたわ。ただの刃を収めるための鞘では、剣が傷ついてしまうから。それで呪文が消えるわけじゃないけれど、まあ、念のためね」
「ありがとう」

受け取って、ベルトを外し剣を付け替える。
魔女は立ち上がり、踵で木箱を叩いた。

「食べ物を好きなだけ持っていきなさい。天の塔には、ここの裏手から回っていけば一直線に行ける。半日掛からないわ」
「助かる。分かった」

革袋に必要なだけ譲ってもらう。
水も食料も新しくさせてもらえたのはありがたかった。とはいえ、それもあと半日の旅路なのだが。

「じゃあ、行くか。ミルシエーラ」
「はい」
「ま、気をつけなさい。転ばないようにね」
「俺は子どもか。分かってるよ」

笑ってしまいながら、答える。
黒の魔女は軽く手を振る。わざわざ見送る気はないらしい。
ミルシエーラは深く一礼して、別れの挨拶に代えた。

空は明るく晴れ渡る。聞き慣れた滝の遠い音色が響く。
盤座のような岩盤の裏に、絶壁を回りこむように小道が伸びている。おそらくここを回り込んでいけばいいのだろう。
砂利道の下は急勾配になっていて、昨日登ってきた崖の上にたどり着くようだ。かすり傷では済まないだろう。

ミルシエーラと顔を見合わせて、うなずき合った。
岩山の見晴らしは不気味なほどよく、遠くまで朝靄に白んだ灰色山脈の稜線が見える。峯禄山の頂上は鋭角になってまだ遠い。頂上を目指すならロッククライミングの装備が必要だろう。その高い山が壁になって、ここからでは天の塔が見えない。

「た、高いですね」

ミルシエーラが乾いた声でつぶやいた。
見れば、壁にすがりつくようなへっぴり腰で、一歩ずつ確かめながら歩いているらしい。たいがい俺も慎重にゆっくり進んでいたが、彼女はさらに遅く離れていた。
追いつくのを待って、手を差し出す。

「ほら。手を貸せ」
「え？」
「多少違うだろう。たぶん」

いざとなったらファイト一発リポっとビタンで助かるだろう。
いや、冷静に考えたら、もろとも落ちる可能性のほうが高いか。実際ファスからも、そうやって振り落とされたわけだし。
しかしミルシエーラはそろっと手を握り、さあこれで安心とばかりに力の抜けた笑みを向けてくれた。
その細められた翡翠の瞳が、思いがけず美しくて、見惚れそうになる。慌てて前を向いた。

「じゃ、じゃあ行くぞ」
「はい」

ミルシエーラはやや落ち着いた口調で答える。

「私、高いところって駄目なんです」
「そうなのか？」
「高いところっていうか、足場の悪いところが」
そりゃあ大好きって人はなかなかいないと思うが、そういえば確かに、ミルシエーラは聖剣の祠でも細道を怖がって留守番していたな。
あのときは一人で行かせることを狙っての行動だと思っていたが、こうしてみれば確かに、足の歩みは探るようで重い。
なんだか、笑えてきた。
「人が怖がってるところを笑わないでください」
ミルシエーラが怒ったように手を強く握ってきた。
「ああ、悪い。違うよ。思えばミルシエーラとも長い付き合いだと思ってな」
「長い、ですか？　まだほんの数日じゃないですか」
まあ、そうなんだけどな。
そう思ったらミルシエーラも笑い声をもらした。
「そういえば、忠志様と出会って、まだ数日でしたね」
「な？　おかしいだろ？」
「ええ」
今度はミルシエーラも同意した。
長いようで短い旅路だ。とはいえ、本番はこれからなのだが。
小道がきつく曲がり、そこを越えると急に視界が開けた。

まるですべての山が申し合わせたように、その中心に向かって下っている。
灰色山脈の盆地。
その中心には天の塔がそびえている。
まだ遠い。
しかし、もうすぐだ。
振り返ってミルシエーラを見る。翡翠の瞳が美しい、異国人のような高い鼻と白い肌を持つ少女。

「この旅の道連れが、神子がミルシエーラでよかったよ」
「私も、神子でいることができてよかったと思います」

本当にミルシエーラとでよかった。

「あれ？」
「どうされました？」

ミルシエーラが足を止めた俺を嫌そうに見る。
視線に急かされて歩き出しながら、意識は思考に没頭する。

俺はずっとミルシエーラを生命の象徴と、俺の命の象徴と考えてきた。
でもそれは、壮絶に当たり前だが、神子がミルシエーラでなければ成立しない。
すなわち、勇者の半身といえる神子が、ミルシエーラであることに、意味がある。

ミルシエーラは色々と気が利いてサバイバル能力に長け頼りになる、しかし滅多に表に出さない繊細な側面も持つ、芯の強い女性だ。
村人や魔女とも違う、綺麗な翡翠の瞳と異国人めいた風貌をして

いる。それは隔絶された、強い他者性を持つ。つまりは、外在性に強い要素がある。

つまり、なぜ勇者が灯火のペンダントを扱えないのか、だ。

それはもともと神子にしか扱えないものである、という現実の他に、勇者は単体で完成しないという側面があるのではないか。

神子とは、勇者ではない別の何かが勇者に深く関わっている、ではなく、勇者に足りないものを補完する、逆説的因果関係にある存在なのではないか。

事実、ミルシエーラは俺にできないことがたくさんできるし、彼女の知識には常々助けられてきた。

逆にミルシエーラの奥ゆかしさが懊悩を招いたように、俺のふてぶてしさは彼女にはない、んだろう。

「忠志様！」

強く引っ張られて我に返る。

止まった足が滑って、指先が虚空に飛び出した。

「わ。うわっ、うおわあっ！？」

足を引っ込める。腰が突然冷たい腕に鷲掴みされたかのように冷えて震える。

「こんな危ないところでボケッとなさらないでください！　本当に！　意気揚々と崖に歩いていくなんて、私、胆が潰れるかと思いました」

「す、すまん。悪い、ごめん。マジ助かった」

まだ体が震えている。ほんのちょっと爪先が出ただけだが、完全

に油断してたせいで、本当に生きた心地がしなかった。
はあっ、とため息をついたミルシエーラは、微笑んだ。
「無事で済んでよかったです。こんな危ないところ、さっさと通り抜けてしまいましょう」
「ああ、そうだな」
もう少し行けば、道も少しずつ広くなって、山の裾野に合流する。
危険な崖道もあと少しだ。
ガスの抜けるような音。
パラパラ、と土が降ってきた。
なんだ、と思う暇もなく、目の前に青紫の塊が落ちる。それは両の足で立ち、両の腕を威嚇するように広げ、醜く歪んだ顔で笑う。
ディエドだった。
「なっ」
ミルシエーラが息を呑む。
慌てて剣を引き抜いた。見慣れない図形で文字らしいものが彫り込まれており、その文字は淡く青く輝いている。
「ファスは、ファスはどうしたの！」
ミルシエーラの言葉など初めから聞こえていないかのように、ディエドは反応を見せない。
剣尖を向けても、ディエドはあざ笑うような表情を作るだけだ。
かすれた、吐く息だけで言葉を作ろうとしているような声で、ディエドは言った。

「お前に、俺は、倒せない」
「そうだろうな」

そんな気はしている。
ディエドは死の象徴で、俺にはそれを振り払う手段がない。これが俺の象徴だと考えるのは、あまりにおぞましい。
しかし、逆なのだ。
この存在ほどのおぞましさが、俺の中に存在している。
死は、否定しても、意味がない。

「死には再起の意味がある」

ディエドが飛び掛ってきた。リーチを生かして剣で後の先を取って切りつける。
だがディエドは切られた肩をかばう様子もなく、なぎ払うように腕を振るう。
剣で受ける。
そのまま押し込んできた。
ずりっ、と靴があっけなく滑る。

「くそっ」

跳ね飛ばした砂利が崖に飛び込んでいく。
強引に振り払った俺を、ディエドは蹴りつけた。跳ね上がった砂利の匂いが妙に鼻につく。鉄球が腹に直撃したような衝撃に、息が漏れた。
砂利を跳ね散らして体が転がる。ミルシエーラは一瞬それが音だと認識できないような悲鳴をあげた。
とんでもない痛み、臓腑が潰れて血が腹を圧迫しているような、

妄想の錯覚。
横隔膜と胃袋が痙攣している。息が出来ない。
ディエドは笑う。

歯を食いしばる。
生で死を振り払うことは出来ない。
それでも。

死は正しく送れば、生を育む。

「ミルシエーラ、こいつを焼け！！」

息を吐くだけで、腹の中身が雑巾絞りされるような激痛を押して、叫んだ。
想像より十分の一も小さい声だった。
ディエドが顔を跳ね上げる。
目が合って凍りつきかけたミルシエーラは、腕をぎこちなく動かし、ペンダントを握った。

「はァっ」

腐れてめくれ上がった口角を吊り上げて、ディエドが笑う。
ミルシエーラは怯えと恐怖で顔をくしゃくしゃに歪めて、

「う、あああああああああああああっ！」

ペンダントを投げつけた。
大して速くもなく、かんしゃくを起こした子どもだって、もうちょっといい球を投げる。ディエドは避けようともしなかった。
しかし、飛ぶ途中でルビーは、まるでその中に星が埋まっている

かのように強烈に輝き、内側から弾け飛ぶように砕けた。
中に残った星は、火の粉としてディエドに降りかかる。
火の粉はディエドにぶつかり、その体をなぞるように転がり落ちる。
途中で消えず、それどころか、触れたそばから燃え広がりながら。
「ぐ、が？」
体が燃えていることに初めて気づいたかのように、自分の体を見下ろす。
その一瞬の間に、火は全身に燃え広がっていた。
「が、ぐ、あぎ、あがあああああああああああああ！」
火をもみ消そうと体中を叩き、もがきながら火達磨になったディエドは後ずさり、
そして、崖から転がり落ちた。
「ごあぁぁぁぁ――――……」
声はすぐに途切れた。
ほんの少し、浅い呼吸を少しずつ繰り返す。
ミルシエーラがすぐに俺の体を横倒しにした。足を組み、自分の腕を枕にするような姿勢。なんだったか、確か回復体位。
「大丈夫ですか？」
「それなり。ごっ、ひ」
咳き込むと死ぬほど痛い。

少なくとも痣にはなっているんじゃないだろうか。喀血の気配はないから、ひとまずは安心したほうがいいだろう痛い。

「ディエドは……」

「落ちていきました」

ミルシエーラが恐る恐る崖から首を伸ばす。

声を出そうとして失敗した。呼吸が安定しない。

ホラー映画では、こういうときは死に損ないの敵が戻ってきて、覗き込んだやつを道連れにするか、または殺したあと平気な顔で元通りに動くのだ。ミルシエーラには任せたくなかった。

しかし彼女は、緊張した顔で俺の横に這い戻ってきた。

「底で燃えたまま動きません。死んだのでしょうか」

「死んでるよ、もともと」

はあ、とため息を吐く。

死者を燃やすのは、正しく自然に返すために。

「やっと、居るべき場所に向かったんだ。ディエドは」

それは、俺も。

蹴られた痛みとは別に、胸がえぐられるように痛む。

どうしようもないのか。どうしてそうでなければならないのか。

抗えば、抗うだけ、つらくなる。

分かっているのに。

「忠志様。傷の手当をいたします」

「ああ……すまん、頼む」

仰向けに転がる。ディエドに切り傷は貰わなかったが、打撲だからよかったとは行かない。
治療道具を広げてミルシエーラが手早く腹の打撲を診てくれる。細い指先が腹に触れて、くすぐったい。
しかしミルシエーラは鈍い手つきを止めて、顔をうつむけた。

「忠志様……」
「どうした？」

まさかそんな、自覚症状が一切ないくらい、見るに耐えない惨状なのか？
見てみようにも、自分の腹を見下ろすための腹筋を動かすと、全身がよじれそうなほどつらい。

「よかった、です……生きていらして……」

指先が震えていた。

「ファスみたいに、いなくなってしまったらって、怖くて……私……」

涙が垂れて、腹に落ちる。その衝撃でも地味に痛かったが、それは嫌な痛みではなかった。
苦笑して、手を伸ばす。

「お前のおかげだ。ありがとう」
「はい……」

ミルシエーラは大人しく頭を撫でられた。

10：　終結する

「物語が終わるとき、役者（キャスト）の意志は関わらない。悲しいことだけどね」

まるで広大な砂漠を歩いているかのようだった。
灰色山脈の盆地には、荒涼とした荒野が広がっている。峻険な山々に囲まれ、まるでケーキの型抜きの底を歩いているかのようだ。
日は中天に差し掛かり、青白い空が柔らかく広がっている。

盆地は広すぎ、山は多すぎ、天の塔はあまりにも大きすぎる。歩いても歩いても、進んでいる気がしない。
夏というほど暑くはないはずだったが、日差しを遮るものがなく、風が全くない。体温はじりじりと上がっていく。

「大丈夫か、ミルシエーラ」
「はい」
「無理はするなよ。疲れる前に休まないとな」
「分かっています。……それを言ったのは私ですよ」
「そうだっけ」

ミルシエーラは小さく笑った。ふと、何かを探すように、視線を背後に流す。いつの間にか魔女のいた山が、ずいぶんと遠くなっている。
何も言わずに視線を戻したミルシエーラの横顔で、なんとなく察する。
ファスは、無事なのだろうか。

追いかけたはずのディエドが姿を見せた時点で、望みは薄い。しかし、俺だって命を何度も助けられて、恩を感じないほど厚顔無恥ではない。どうか無事でいてほしい。
俺が言うのも、皮肉だが。

「それにしても、大きいな」

何がなどと言う必要はなかった。ミルシエーラも天の塔を見上げてうなずく。

「本当に。感覚がおかしくなってしまいそうです」

というより、すでにおかしくなっていた。
巨大な塔を支えるため、基礎部分の大きさは尋常ではない。山と見間違えてしまいそうだ。建材を安定させるため、塔の形となれば本来は円錐形や三角錐が望ましいはずだが、この塔は円柱のまま、景色を引き延ばしたかのように霞むほど高く伸びている。普通ではない。
全く、どんな技術でこんなことが成し遂げられたのか、うかがい知れない。魔王の所業と呼ぶにふさわしい、無茶苦茶な存在だった。

「忠志様、どうぞ。水分は小まめに補給しないといけませんよ」

ミルシエーラに水袋を勧められる。
本当に頼りになる。
口を湿らせるくらいでやめて、水袋を返す。ミルシエーラは受け取った水袋を見つめて、うつむいた。

「忠志様。お願いがあるのです」
「ん。何だ？」

「もし、もしもですけど。魔王を倒しても、このままこの世界にいられそうなら……一緒に、暮らしませんか」
「なんだって？」

ミルシエーラの表情は不安げに揺れていた。
前も言っていた。神子として以外に、生き方がない、と。
それに事実俺は見ている。ミルシエーラが村人に、不思議そうな顔で見送られていたことを。
ミルシエーラは、神子は、外在性に強い要素がある。この世界に生きながら、この世界に繋がりが薄い。そうでなければならなかった。他でもなく、神子であるために。
先生だったらしい長老は見るからに老い先短く、ファスさえ……帰るかどうか、わからない。

「そうだな、魔王を倒してもこの世界にいられるなら、一緒に暮らすのもいいかもな。よく考えればそのときは、俺だって身寄りがないわけだから」
「ふふ。そうでしたね。私も失念していました」

ミルシエーラはちっとも安心したようには見えなかった。俺も同感だった。
この世界の者ではない俺が、魔王を倒してもしつこく居残るのは、筋が通らない。伝承でも語られていたはずだ。
勇者は魔王の出現に呼応して現れる、と。
ならばその退場もまた、タイミングを同じくすることに何の不思議もない。

「きっと旅が続いているみたいに思えちゃいそうですね」

ミルシエーラは不安げに揺れた瞳のまま、楽しそうに笑う。俺も

合わせて笑顔を浮かべる。空しい談笑は、長く続いた。
塔にたどり着いたのは、思いがけず早かった。
大きさに騙されて、遠近感が完全に狂っていたのだ。ふと気づいたときには、すでに間近に迫っていた。魔女の言う通り、出掛けて半日が経とうとしている。

「忠志様」

ミルシエーラが両手で俺の右手を取った。
急に思い出す。
最初に来たときは、ミルシエーラは俺にさえ怯えて、遠慮がちに指先しか取らなかった。

「大丈夫だ」

ミルシエーラが俺を見上げた。

「この今、ここにいる俺たちで成し遂げられる。これはもう、間違いのないことだ」

俺の言葉に呆気に取られたように、ミルシエーラは口を小さく開けている。ふっ、と肩の力を抜いた。

「分かりました。そうですね、ここまで来れたんです。大丈夫ですよね」
「ああ」

天の塔を見上げる。
どこまで高いのか分からない塔は、威容に似合う重厚な作りの扉を開いている。厚さだけで三十センチはある石で、大きな半円を幾

何学的に重ねたような模様が彫り込まれている。
もはや言葉も要らなかった。
歩調を揃え、塔に踏み込む。

なかはヒヤリと冷たい空気がたまっていた。うすら寒い不気味さではなく、時間が止まっているかのような、静謐さを感じさせる涼やかさだ。
見える限り、高い吹き抜けの塔に灯りはなく、入り口の明かりが届かない先は完全に闇に呑まれていた。
空気の動く遠い音が響いている。下手をしたら、塔まるごとが吹き抜けなのかもしれない。

「魔王はどこでしょう……」

ミルシエーラは不気味そうに怖々とささやく。
その瞬間、塔の扉が閉まった。太鼓を打ち鳴らすような、あるいは爆発でも起きたかのような、重く大きな空気の鳴動。音だけで張り飛ばされたような感覚に、耳がひりつく。
そして塔のなかは完全な暗闇になった。

『勇者よ』

どこかから声が響いた。
暗闇では、遠近感も上下感覚もない。目の前が壁のようにも、無限の平原のようにも思える。目を閉じても開いても感覚が変わらない。見上げても見下ろしても、何も変わらない。自分という存在さえ失われてしまったかのようだ。

『勇者よ』

またどこかから声が響いた。耳元で重くささやいているようにも、果てしない遠くから朗々と語りかけているようにも聞こえる。いや、果たして本当に聞こえているのだろうか。幻聴や耳鳴りなのではないか。

なにもかもが不確かだった。

『勇者よ』

声は語る。

『勇者よ、貴様に我は倒せぬ』

声は揺るぎなく、脳裏に響き、世界そのものが声に染められていくような、あるいは声そのものが世界であるかのような、そんな奇妙な感覚に囚われる。

『貴様に我は倒せぬ。我こそは魔王、世界を統べうる唯一ぞ』

そうかもしれない。そうなのかもしれない。

殴られた。

「忠志様？　忠志様っ」

探るような手つきで俺の体をべたべた触る。この声はミルシエーラに違いなかった。

「ああ。俺はここにいるぞ」

体を探る手を握る。懸命に、まるで大海の真ん中で唯一の頼りを掴むかのように、ミルシエーラは手を強く強く握り返してきた。

「ああ、忠志様……よかった。いなくなってしまっていたら、どうしようって」

心から安心したように、ミルシエーラは震える声をあげる。腕に体重がかかる。腰砕けになっているようだった。

「大丈夫だよ、一歩も動いちゃいない」

思わず、笑う。そうだ、さきほどから動いていない。馬鹿に広い塔の入り口に突っ立っているはずなのだ。

不思議と、暗闇の中でも立っていられそうな気がした。足は石造りの床を踏みしめて、天井は遥かに遠く、塔の入り口はすぐそばにあるはずなのだ。空間感覚を取り戻す。

『勇者よ』

声がする。確かにどこから聞こえるのか分からない。

『勇者よ、貴様に我は倒せぬ。我こそは世界を統べる唯一ぞ。抗うべからず、貴様に敵う道理などない』

「た、忠志様……！」

ミルシエーラが怯えたように、腕に身を寄せる。視界ゼロの状態では、服を圧す感覚だけが全てだった。

しかし、別のものは見えてきた。

「なあミルシエーラ。レテル……いや魔女は、言ってたよな。魔王は斬って倒せる相手じゃない、存在そのものが脅威だ、って」

「え？　は、はい」

「つまり、これが魔王なんじゃないか？」

これ、といっても、何を指しているのか見えないだろう。しかしそれこそが真実なのだ。

「まさか、魔王の正体は……闇！？」

ミルシエーラが愕然と叫ぶ。

「いや、少し違うな。闇は現象だ。ディエドを従えたりしないし、世界を滅ぼしもしない」

見えない、見通せない、というのは一側面に過ぎない。魔王はどこにいるのか分からないし、何者なのかも分からない。

つまり、

「”未知”。たぶん、それが魔王の正体だ」

ディエドがなぜ、死したまま生きるような、矛盾した怪物と化したのか。

天の塔はなぜ、突然現れたのか、どのように出来ているのか。

謎は憶測を呼び、不明は恐怖を招く。

ゆえに魔王は魔王足りうるのだ。

「とはいえ……そんなものを、どう祓えばいいやら、分かりゃしない」

ミルシエーラが怒ったように俺の腕を掴む。分からないんだから仕方がない。

とりあえず剣を抜く。

この剣が魔王を倒す鍵なのは、間違いないはずだ。
シャリン、と鞘走りの音も涼やかに、剣はその身を晒す。
息を呑んだ。
剣身が淡く青く輝いていた。刻まれた呪文が、脈動するように明滅している。

「きれい」

ミルシエーラが思わず呟いたように、確かに、その姿は美しかった。

『愚かなり。勇者よ、貴様に我は倒せぬ』

声が響く。
全く動揺した気配もない。剣を掲げて辺りを指しても、光は淡く、塔を照らすにはとても足りなかった。むしろ、より闇が濃くなったようにさえ思える。

『抗うべからず、貴様に敵う道理などない』

声は語る。調子が一切変わらない。
実は手を出せないのでは、と思ったが、どうもそうではないらしい。そもそも手を出す必要もない。倒せなければ、タイムアップ、勇者の負けだ。
剣の淡い光に照らされて、ミルシエーラの輪郭が見える。頼もしげに俺を見つめていた。
そんな表情をしていたのか。
苦笑が浮かぶ。ここで失敗するわけにはいかない。ここまできて、失敗とは、少しばかり格好がつかない。
とはいえ、魔王に何も与えていないのも事実だ。キーは足りてい

るはずだが、何が足りないのだろう。
剣は怪しく紋様を煌めかせる。この呪文は、知識という意味だと魔女は言っていた。剣に知識が付加される、という事象の意味はといえば。
剣、鍛冶は、技術の象徴だ。知識と技術は、発展や知恵か。なるほど、携えて未知を祓うには相応しい。
だが、現実、足りていない。
いや、そもそも剣の輝きで、闇が深くなったようにさえ思える。足りないのだ。知恵で全ての闇を取り払うことはできない。科学万能主義は幻想だ。
くそ。頭が行き詰まった。どうすればいい。

『愚かな勇者よ』

声が響く。
同時に、激しい衝撃が全身を襲った。

「うわっ！」
「忠志様っ！」

ミルシエーラが体勢を崩して、慌てて引っ張りあげる。転ばずに済んだが、衝撃は変わらず、立っていられずにしゃがみこむ。
衝撃ではなかった。大地が波打つように、激しく揺れているのだ。

「これは……」
『我こそは世界を統べる唯一。抗うべからず、我に敵う道理などない』

声は全く変わらない。塔の激震はいや増していく。

「忠志様！」

ミルシエーラが悲鳴をあげる。

剣が空間の鳴動に共鳴して震える。やばい。いよいよヤバかった。

「くそっ、どうすりゃいいんだよ！　キーは揃ってるはずなんだ！

倒せないわけはないだろ！？」

叫んで、剣を振る。虚しく空を切るどころか、体勢を崩して手をついた。揺れは激しい。

本当に、どうなってるんだ。

いや、待てよ。

倒せることはハッキリしているのに、どうやって、なんて考えているのは、ピントがずれていたんじゃないか？

思い出せ。手札を見直せ。視野を濁らす先入観なんて邪魔なだけだ。見えてる世界をひっくり返せ。

初めに何と言われた？

この世界は、俺に対する救いと罰だ。

ミルシエーラは何と言った？

魔王を倒しうるただ一人の存在で、唯一剣を抜くことができる者だ。

神子とはなんだ？

勇者と対であり機能を補う、必要不可欠な存在だ。

長老は何と言った？

剣を用いて魔王を倒すのだ。

魔女は何と言った？

魔王は実態がなく、存在そのものが世界を脅かす。そして、すべてはこの今でしかありえない。

ディエドとはなんだ？

生死の摂理に反した、俺の写し身だった。

剣はなんだ？
魔王を倒す鍵であり、勇者の象徴だ。そして、知識を刻んでより輝きを増した。
勇者とはなんだ？
この世ならざる俺が任ぜられた、魔王に対する切り札だ。
勇者と魔王は近しくあり対立する、対応関係にある。勇者と神子は重なりつつも、絶対的な差異に支えられる。勇者と剣は限りなく近い。魔王の討伐は通過儀礼で、次の段階に昇華するための事象にすぎない。
俺はどうなったか。
俺はどうするべきなのか。
それが答えだ。

「ミルシエーラ！　来い、試したいことがある！」
声を張り上げる。膝を立てて、這うように寄ってきたミルシエーラの手を取る。
「剣を持て！」
「あ、なっ、ダメです！　勇者の剣は勇者様しか触れてはいけません！」
「じゃあ俺の手ごとでいい！　とにかく剣を持て！」
激震に揺られて話すどころではない。ミルシエーラはゴネながらも、俺の手の上から剣を持った。
「灯火のペンダントを灯すみたいに、剣を光らせてみてくれ！」
「そんなこと」
「ムリでも試してみろ！」

ミルシエーラは一瞬ためらったあと、体を力ませたのが感じられる。
そのとき、剣が強く輝いた。強く強く、瞼を閉じても目を焼くほどに。持つ手も、光を受ける体も焼き付くされそうなほどの、暴力的な光だ。
顔をあげて、目を開く。
光の闇に視界が奪われるまでの一瞬。塔の内部が見えた。確かに、遥かに遠くまで、どこまでも伸びていた。
天まで届くかのように。

『勇者よ……我は、我が、我を……我……』

声が初めて揺らいだ。かき消される。
振動もいつしか消え、目も耳もない空間が残される。ミルシエーラの感触だけが、唯一にしてすべてだった。

「忠志様？」

声が遠い。

「簡単な話だったんだ」

伝える言葉は、まるで砂細工で作られているかのように頼りなくて、曖昧だった。

「ミルシエーラが勇者に対応し、魔王が『勇者に倒せる道理はない』なら、神子の力が合わされればいい」

それでも構わなかった。ミルシエーラに伝えられるなら。

「魔王の正体は、未知じゃない。未来だ。掴み取られるためにある、どこまでも強大な敵」

ミルシエーラがどこにいるのか分からない。今どこにいるのかも分からない。しかし、最初からそうであるべきだったのだ。

この世界が異常だなんて、当たり前に分かっている。

「同時に、俺の未練でもあった。未来を欲し、無理やり求めた歪みを、世界の形に現していたんだ」

本当は分かっていたんだ。我を通し、純然に存在する流れを止めることの、おぞましさを。

「世界は三重構造になっていたんだろう。俺の知らない営みが行われる異世界、魔王を倒すという物語を持つ構造世界、そして、俺自身の心象世界」

「忠志様！」

ミルシエーラが遮るように叫んだ。

「魔王を倒したら、一緒に暮らすって、言ったじゃないですか……！」

「馬鹿。最初から、それでも残るなら、って約束だっただろ」

笑う。ミルシエーラも本当は分かっていて、唇を噛んでうつむいた。

「魔王を、自分の未練を打ち払ったら、後に行くところはひとつだ。……だからこその、魔王が守る『天の塔』ってわけだ」

馬鹿にしている。最初から答えが提示されていたようなものだ。
この筋書きを書いたやつは、よほど性根が腐っているに違いない。
俺の望んだ通り生き長らえて、それは俺の望む世界でのことではなくて、気に入りかけたその世界から別れるために、全身全霊を注がねばならない。
これぞまさしく、救いと罰だ。

「忠志様！」

ミルシエーラが叫んだ。

「また、会えますよね」
「もちろん」

自信を持って言える。
なにせ、ミルシエーラは俺自身で……逆説的に、俺はミルシエーラ自身、なのだから。
ジシンだけにな。
その瞬間、何か大きな塊に吹き消されるように、ミルシエーラの感覚が離れた。つかんでいた紙が吹き飛ばされるように、遠く、遠く、流れていく。
意識の端に、ふんす、というか、はす、というか、そんな聞きなれた獣の息づかいを感じた。

それっきり。
悪い気分じゃない。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9020w/

典型的な魔王討伐物語

2011年10月3日09時22分発行